

令和5年度 文化庁 日本語教育人材の研修プログラム普及事業

難民等に対する日本語教師（初任）研修報告

実施機関名	社会福祉法人さぼうとにじゅういち
事業名	難民等に対する日本語教師初任研修プログラム普及事業
研修実施地域	南関東、北関東・甲信、東海、九州・沖縄ブロック
事業実施期間	令和5年5月～令和6年3月
研修受講者数及び 研修修了者数	研修受講者51名中、研修修了者47名

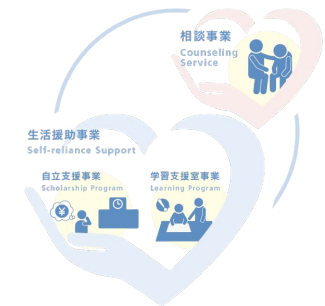
研修報告の構成

1. 研修実施団体の概要 . . . p.3
2. 事業全体の概要（目的・取組内容、研修の流れ、実施体制、スケジュール） . . . p.4
3. 事業内容 . . . p.8
 1. 求められる資質・能力と研修内容の関係
 2. 研修スケジュール
 3. 各研修の概要（演習、演習特1、演習特2、実習） 募集・受講者・修了者の情報
 4. 研修前後のフォローアップ体制
4. 事業評価概要 . . . p.18
 1. 評価の観点及び検証方法
 2. 受講者アンケート分析
 3. 最終レポート分析
 4. その他定量値による簡易分析
5. 成果と課題 . . . p.33
- 【参考資料】 . . . p.41

難民等に対する日本語教師（初任）の資質・能力、講義内容一覧、受講者アンケート結果

1. 研修実施団体の概要

社会福祉法人さぽうとにじゅういち（通称さぽうと21）は
「困ったときは、おたがいさま」を活動のキーワードに、
難民・中国帰国者・日系定住者など、日本に定住する外国に
つながる方々の自立を、
主に教育の側面から支援する団体です。



【事業内容】

1 相談事業

生活関連情報の提供および相談への対応

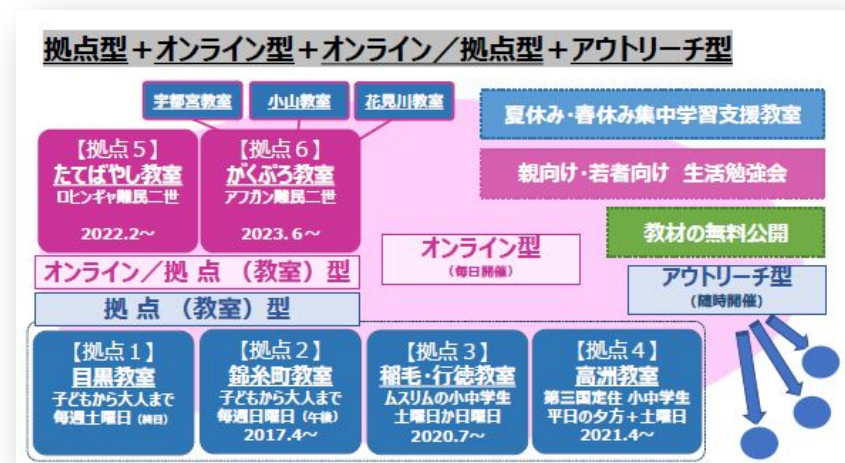
2 自立支援事業

難民等外国ルーツの学生対象の就学支援

3 学習支援室事業

ボランティアによる日本語や学校教科の学習支援

【学習支援室事業全体図】



2. 事業全体の概要

【目的と取り組み】

1	難民の自立支援団体の知見を活かして、難民的背景をもつ日本語学習者を多視点から理解し、対人援助としての日本語教育の姿勢をもち、有用な日本語教育を行うことのできる日本語教育人材を育成すること	研修プログラム
2	難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、実習できる場、研修終了後も実践を重ねることのできる日本語学習の場をつくりだすこと	難民等への日本語教育を行う実践の場 「にほんごぷろぼの」運営事業
3	難民的背景をもつ人々が日本全国に居住する現状をふまえて、東京近郊のみならず、全国的規模で難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材を発掘し、育成すること	研修プログラム
4	難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、互いの知見を共有し、長く本分野に関わり続ける意欲を維持できるようなプラットフォームを構築すること	難民等への日本語教育人材が互いの知見を共有する場「難民等への日本語に携わる日本語教師のつどいば（集いの場）」運営事業
5	全国各地に、難民等に対する日本語教師【初任】研修の実施経験をもつ個人もしくは団体を育成し、それら個人もしくは団体（さぽうと21を含む）が、難民等への日本語教育の拠点、難民的背景をもつ方々の日本語教育の相談窓口として認知されるようになること	研修プログラムへの拠点先の関与、相談窓口・サービス情報を受講者へ共有、ウェブサイトで当該事業を公開 研修プログラム

2. 事業全体の概要

【取り組みの関連図】

講義

（難民等概論、難民等への日本語教育、難民の多様性、難民等の社会参加）
※難民支援の現場経験のある講師が計15回（計34単位）の講義をオンラインで実施

演習

知識・技能・態度
傾聴、異文化調整能力、評価、「わざ」

演習特1

日本語教育実践の
現場見学

演習特2

難民当事者との対話

第1期：東京、オンライン

第2期：東京、栃木、愛知、大阪、オンライン

実習（90分×4回） ※中間、終了時に実習アドバイザーとの個別面談

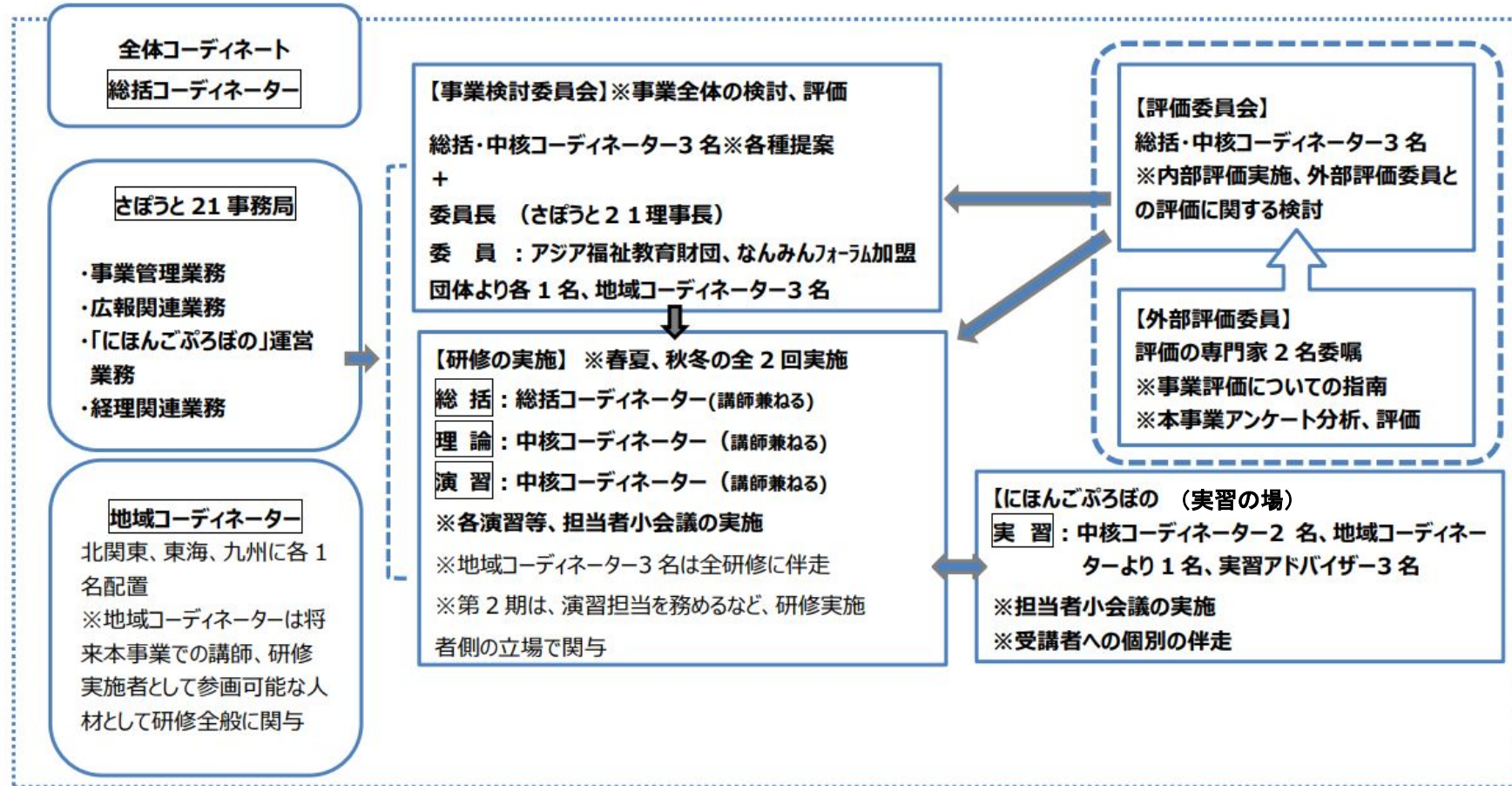
にほんごぶろぼの

実習の場（研修中）

実践の場・つどいば（集いの場）（研修後）

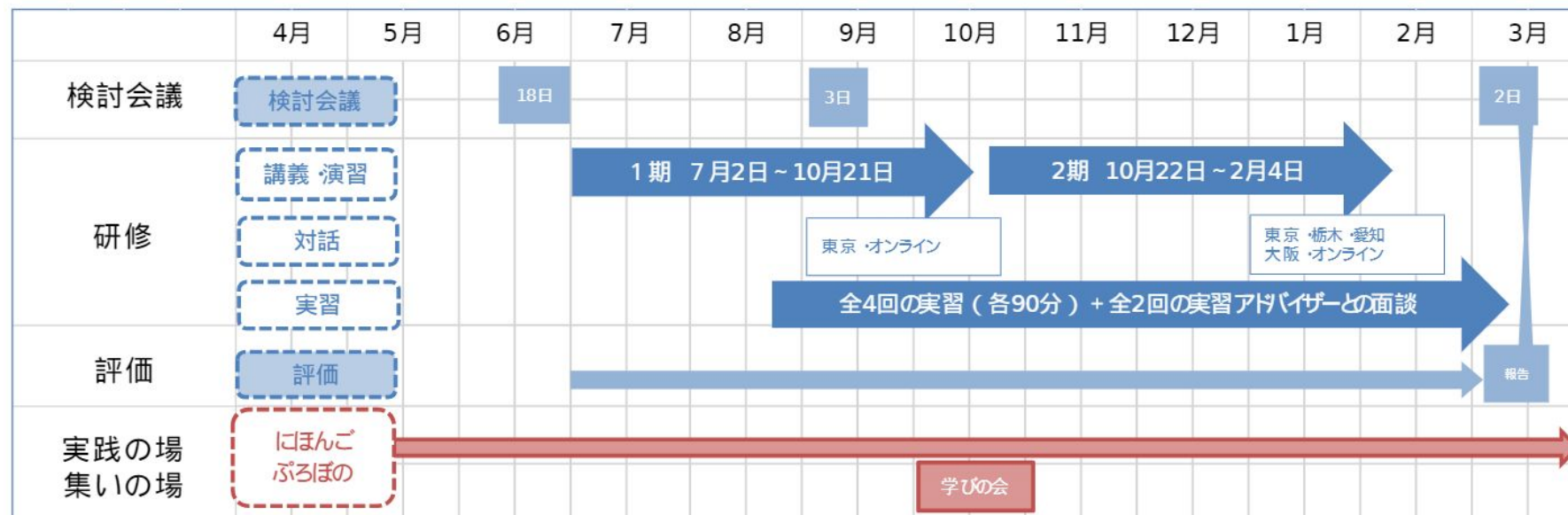
2. 事業全体の概要

【実施体制】



2. 事業全体の概要

【実施スケジュール】



検討会議：年3回（2023年6月・9月、2024年3月）開催。総括コーディネータが提案した事業計画案について中核コーディネーターが検討を加え、事業検討委員会にはかった。

研修：第1期（2023年7月開始）および第2期（2023年10月開始）の2期行った。2期ともに、講義・演習については、難民支援の現場経験のある講師等を招き、完全オンライン（Zoom）にて実施。うち、当事者との「対話」を通じた演習（演習特2）は、第1期は都内での対面またはオンラインにて実施した。第2期は、都内のほか全国3カ所を加えた全4か所で対面で実施するとともに、対面参加が難しい受講者にはオンラインで実施した。実習は、受講者の都合と学習者の都合で個別に調整し、研修中に随時オンラインで実施した。

評価（事業評価）：2023年7月以降に評価委員会を6回開催し、事業評価の方法を議論。検討会議にもはかりつつ、事業評価を実施した。

実践の場・つどいば（集いの場）の運営：事業期間中、研修受講者を含む全国の日本語教育人材や難民支援等の専門家にオンラインプラットフォームへの参加を呼びかけた。2023年10月にセミナーとして「学びの会」を開催した。

3. 事業内容

3.1. 求められる資質・能力と研修内容の関係

難民的背景をもつ日本語学習者を多視点から理解し、対人援助としての日本語教育の姿勢をもち、有用な日本語教育を行うことのできる日本語教育人材の像として具体化。研修の「4つの到達目標」として言語化。

文化審議会国語分科会（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』で示された知識・技能・態度に関する記述

本研修の「4つの到達目標」

①背景理解と配慮

「難民等」の背景について理解し、その思いや抱えている（かもしれない）困難に想像力を働かせながら、必要な配慮について考え、実際の教育/学習支援の活動に具体的な形で取り入れることができる。

②共感的理解とQOL向上への貢献

「難民等」のその時々ニーズや困りごと、置かれている状況や環境について共感的に理解しようと努め、それらに対して日本語教育/日本語学習支援の立場から適切にアプローチをすることで、「難民等」のQOL (quality of life) の向上に貢献できる。

③可能性と限界の理解と連携・協力、広い視野からの対応

「難民等」に関わる多くの人々や機関について理解し、日本語教育/日本語学習支援の立場からできること/できないことを整理しつつ、関係者・関係機関と適切につながりながら、広い視野・総合的な視点から「難民等」に対応できる。

④実際の条件・環境を出発点とした授業やコースの組み立てと修正・調整

「難民等」への日本語教育/日本語学習支援が実施されている様々な環境について理解し、実際に自分が担当者・実施者になった際に、与えられた条件・環境（場所、時間、対象、クラス形態等）の下、「難民等」のその時々ニーズや困りごと、置かれている状況や環境から出発し、授業やコースを組み立て、さらに必要に応じて修正・調整を行いながら授業を実施することができる。

難民等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力 表6

	知識	技能	態度
【1 基礎教育に関する基礎的な知識】	① 世界の諸国民の状況や文化・歴史の発展を取り巻くについて適切な知識を持っている。 ② 日本の基礎等受入れ施策に関する基礎的な知識を持っている。 ③ 難民等に対する日本国教育の経緯や意義を知っている。 ④ 難民等に対することばが学習上の様々な困難について理解し、日本国教育の場においてコミュニケーションを取ることの基礎的な知識を持っている。 ⑤ 難民等に対する日本の生活及び習俗について支援内容や、問題が起きた場合の相談先や支援体制について知識を持っている。	① 日本国教育プログラムを基盤とし、子供らに動機づけや学習意欲の状況に応じ、適切な指導計画を立てることが出来る。 ② 学習者の状況やライフスタイルに応じて指導方法を選択し、効果的な指導が出来る。 ③ 学習者の個性や背景、精神状態や心理に配慮した表現活動、コミュニケーションを図ることが出来る。 ④ 学習者の自らの日本国教育を受けるために、IC での多様なやり取りを通じて理解し、それらを基盤とした教育が出来る。 ⑤ 学習者と文化・民間関係者とに分かれず、学習動機にも配慮した評価を行うことが出来る。	① 日本国教育の専門家として、学習者自身の課題・目的・目標を把握し、教育実践により課題を解決せよとする。 ② 日本国教育を通して、学習者の QOL の向上及び社会への貢献につとめる。 ③ 英語や外国の知識や文化に精通し、多岐にわたる指導を行うことができる。
【2 日本国教育に関する知識】	① 難民等に対する日本国教育の場を行う上で、配慮すべき事項に関する専門知識を持っている。 ② 難民等に対する日本国教育プログラムの効果的に実施するための必要となる教育実践に関する知識を持っている。 ③ 難民等の日本国教育と学校教育についてした評価に適切に行うための必要となる知識を持っている。	① 指導計画に基づき実践した授業や教育活動を分析的に検証し、改善するための必要となるの検討ができる。 ② 指導計画の実果の達成や学習意欲やその実践等の関係とを有し、より具体的改善に繋がるための評価を実施することが出来る。	① 学習者の背景や文化・生活の状況に意を払い、相手の理解に配慮しながら、異文化間のコミュニケーションを目標としてより日本国教育を実施し、より。
【3 文化多様性・社会性に対する態度】		① 社会と学習者をつなぐ、学習者の日本国使用や日本文化の理解、社会参加を目指すための日本国教育としての取り組みができる。 ② 高年齢の日本国教育を受けることになった児童を求めるときは多岐にわたる、生活学習としての日本国教育という観点から活動がデザインすることができる。	① 文化多様性・社会性に対する態度 ② 学習者個人と文化の、ネットワークを構築する力を育くことができる。 ③ 地域社会や学校と連携・協力し、教育の目的を達成するための、エンパワーメントとしての日本国教育を実施し、より。

難民等に対する日本国教育の担任

3. 事業内容

3.1. 求められる資質・能力と研修内容の関係

難民等に対する日本語教師初任研修プログラム各科目と「資質・能力」、到達目標の関連図

本研修の到達目標を色別で示し、関係性の高い科目を同じ色（もしくは☆印）で記している。「実習」は難民当事者との実際の関りの場であり、同時に「理論編」「演習」での学びのパフォーマンス発揮の場でもある。アドバイザーの伴走により、対話的省察、省察に関する記述を進め、到達目標に近づくことが期待される。
※詳細は、「難民等に対する日本語教師初任研修プログラム普及事業」日本語教師初任者（難民等）研修カリキュラムデザインの狙いを参照されたい。

【理論編】	34 単位	各講義・演習で主に扱われる「知識・技能・態度」	
【講義 A ゼロ】「難民等」概論	2	（講義 A1～A3 の導入）	
【講義 A 1】世界における難民等の現状	2	【知識(1)】世界の難民、日本の難民の状況	一般的概論的理解
【講義 A 2】日本の難民等受入れの経緯と基本的な受入れ方針・体制等	2	【知識(1)(2)】日本の難民等受入れ施策	
【講義 A 3】日本における難民等の現状	2	【知識(1)】世界の難民、日本の難民の状況	
【講義 B 1】日本における難民等の多様性① -概論-	2	【知識(5)】学習上の困難、コミュニケーション	
【講義 B 2】日本における難民等の多様性② -各論-	2	【知識(6)】生活上の困難、相談先	
【講義 B 3】難民等の異文化受容・適応(ケーススタディ)	2	【態度(1)-(3)】学習者に対する態度	個別性・多様性の理解
【講義 B 4】難民への理解を深める 一言語学習者としての側面から一	2	【態度(1)-(3)】言語教育者としての態度	
【講義 B 5】難民への理解を深める 一臨床心理学の視点からの理解一	2	【知識(4)】学習上の困難、コミュニケーションの取り方	
【講義 C ゼロ】「難民等に対する日本語教育」概論	2	（講義 C1-C3 の導入）	
【講義 C 1】難民等に対する日本語教育(公的な支援を中心に)	2	【知識(3)】難民等に対する日本語教育の変遷	難民等への日本語教育
【講義 C 2】難民等に対する日本語教育(公的な支援以外を中心に)	2	【知識(4)】学習上の困難、コミュニケーションの取り方	
【講義 C 3】中国帰国者に対する日本語教育	2	【知識(6)-(8)】難民等への日本語教育に関する知識	
【講義 D 1】難民等の社会参加	4	【態度(1)-(3)】言語教育者としての態度	ケースワークの 7 原則 QOL 向上への貢献
【講義 D 2】難民等のライフステージに合わせたキャリアプランと日本語教育	4	【技能(1)-(5)】難民等に対する教育実践のための技能	
【演習】	26 単位		
【演習ゼロ】難民等に対する日本語教育に必要な知識・技能・態度を身に付けていくには	2	（演習 1～3 の導入）	
【演習 1】積極的傾聴	2	【技能(3)】精神面や心理への配慮	積極的傾聴 社会参加の際の調整
【演習 2】異文化調整能力・課題の共有・評価とフィードバック	2	【技能(1)-(5)】難民等に対する教育実践のための技能	
【演習 3】難民等に対する日本語教育や難民支援実践者の「わざ」を記述する	2	【技能(1)-(5)】難民等に対する教育実践のための技能	実践者の「わざ」
【演習 4】私にとって「難民等に対する日本語教育とは」/教師として学び、成長し続けるために	2	【技能(6)(7)】成長する日本語教師になるための技能	学び、成長し続ける
【演習特 1】さばうと 21 学習支援室他日本語教育の現場を見学	2	【技能(6)(7)】成長する日本語教師になるための技能	現場の見学
【演習特 2】難民当事者との対話と振り返り ※対面	4	【態度(1)-(5)】言語教育者としての態度	一人ひとりの理解

実習（実際の関り・パフォーマンスの発揮）
↑アドバイザーの伴走＋対話的省察＋記述

難民的背景をもつ日本語学習者を多視点から理解し、対人援助としての日本語教育の姿勢をもち、有用な日本語教育を行うことのできる日本語教師人材

4つの到達目標

- ① 背景理解と配慮**
「難民等」の背景について理解し、その思いや抱えている（かもしれない）困難に想像力を働かせながら、必要な配慮について考え、実際の教育/日本語学習支援の活動に具体的な形で取り入れることができる。
- ② 共感的理解と QOL 向上への貢献**
「難民等」のその時々々のニーズや困りごと、置かれている状況や環境について共感的に理解しようと努め、それらに対して日本語教育/日本語学習支援の立場から適切にアプローチをすることで、「難民等」の QOL(quality of life)の向上に貢献できる。
- ③ 可能性と限界の理解と連携・協力、広い視野からの対応**
「難民等」に関わる多くの人々や機関について理解し、日本語教育/日本語学習支援の立場からできること/できないことを整理しつつ、関係者・関係機関と適切につながりながら、広い視野・総合的な視点から「難民等」に対応できる。
- ④ 実際の条件・環境を出発点とした授業やコースの組み立てと修正・調整**
「難民等」への日本語教育/日本語学習支援が実施されている様々な環境について理解し、実際に自分が担当者・実施者になった際に、与えられた条件・環境(場所、時間、対象、クラス形態等)の下、「難民等」のその時々々のニーズや困りごと、置かれている状況や環境から出発し、授業やコースを組み立て、さらに必要に応じて修正・調整を行いながら授業を実施することができる。

☆で示した部分は、複合的な意味合いをもつ「講義」「演習」であることを示している。

2. 事業内容

3.2. 研修スケジュール

第1期研修スケジュール

【第1期】2023年7月-12月

- 講義・演習
- 演習特2（難民当事者との対話）
- 演習特1（授業見学）
- 実習

7月2日（日）- 10月1日（日）
9月3日（日）対面（東京）
9月4日（月）オンライン
8月19日（土）- 9月4日（月）
11月6日（月）- 12月7日（木）

【第2期】2023年10月-2024年3月

- 講義・演習
- 演習特2（難民当事者との対話）
- 演習特1（授業見学）
- 実習

10月22日（日）- 2月4日（日）
1月7日（日）対面
（東京、栃木、愛知、大阪）
1月8日（月）オンライン
12月5日（火）- 12月19日（火）
1月10日（水）- 3月10日（日）



振り返り
（毎回）

見学
記録

演習得2（対話）
レポート

実習
記録

実習
面談記録

最終
レポート

講義内容と日程

日付	回数	午前① 9:30-11:00（2コマ）	午後② 11:10-12:40（2コマ）
7/2（日）	1	【講義Aゼロ】「難民等」概論 筑波大学社会学部 准教授 人見聖弘	【講義Cゼロ】「難民等に対する日本語教育」概論 ※研修についての説明 （社福）さばうと21 矢崎理恵
7/9（日）	2	【講義A2】日本の難民等受入れの経緯と基本的な受入れ方針・体制等 （公財）アジア福祉教育財団 難民事業本部 鈴木功	【講義C3】中国帰国者に対する日本語教育 首都圏中国帰国者支援・交流センター 小川珠子
7/16（日）	3	【講義A1】世界における難民等の現状 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所 夏西希	【講義C1】難民等に対する日本語教育（公的な支援を中心に） （公社）国際日本語及協会（AJALT） 小堀雅子
7/23（日）	4	【講義A3】日本における難民等の現状 FRJ なんみんフォーラム 横山伸美	【講義C2】難民等に対する日本語教育（公的な支援以外を中心に） （社福）さばうと21 矢崎理恵
7/30（日）	5	【演習ゼロ】難民等に対する日本語教育に必要な知識・技能・態度を身に付けていくには 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生	【演習1】横断的概論 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生
8/6（日）	6	【講義B1】日本における難民等の多様性① 認定NPO法人 難民支援協会（JAR） 鎌木由美子	【講義B5】難民等への理解を深める一臨床心理学の視点からの理解 大正大学社会学部公共政策学科 教授 磯川晃
8/13（日）	7	【講義B2】日本における難民等の多様性② （社福）さばうと21 研修コーディネーター 田中美穂子	【演習2】異文化調整能力・課題の共有・評価とフィードバック 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生
8/20（日）	8	【講義D1】難民等の社会参加 （社福）日本国際社会事業団 常務理事 石川美穂子	
8/27（日）	9	【講義B3】難民等の異文化受容・適応（ケースメソッド） 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生	【講義B4】難民等への理解を深める一異文化学習としての側面から 国立国際研究 日本語教育研究領域 野山広
9/3（日）	10	【演習特2】難民当事者との対話＜本番＞ ※対面 （社福）さばうと21 研修コーディネーター 田中美穂子	【演習3】難民等に対する日本語教育や難民支援実践者の「わざ」を記述する 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生
9/10（日）	11	【演習特1】日本語教育の実践の現場を見学（振り返り） （社福）さばうと21 研修コーディネーター 田中美穂子	【演習3】難民等に対する日本語教育や難民支援実践者の「わざ」を記述する 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生
9/17（日）	12	【講義D2】難民等のライフステージに合わせたキャリアプランと日本語教育 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生	
9/24（日）	13	【演習特2】難民当事者との対話＜振り返り＞ （社福）さばうと21 研修コーディネーター 田中美穂子	
10/1（日）	14	【演習4】私にとって「難民等に対する日本語教育とは」／教師として学び、成長し続けるために 社会福祉大学院大学実務教育研究科 准教授 伴野康生	
7月～8月	【見学】難民等への日本語教育を行う機関を訪問、見学		
8月～1月	【実習】田中美穂子 他		

できる限り、対面での参加をお願いしておりますが、ご事情によりどうしても対面参加が難しい方のため、9/4（月）19時半～21時にオンラインでの実施を予定しております。

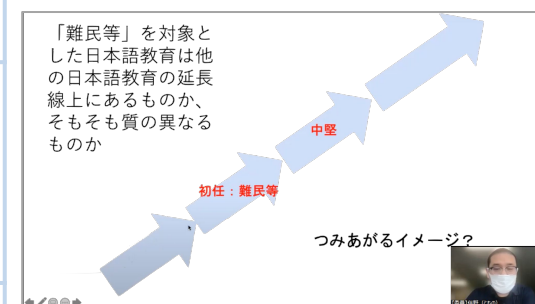
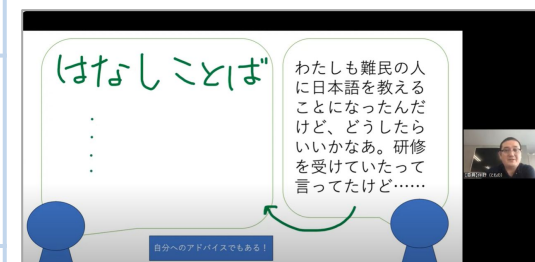
実習は期間内に、金450分（10単位相当）のオンラインでの個別指導となります。日程は個別に調整させていただきます。実習アドバイザーが伴走します。

3. 事業内容

3.3. 研修の概要（演習）

【演習0～4：個人／グループワークを通じた演習】（担当：伴野崇生・和田貴子）

演習0	- これまでかかわってきた日本語教育についてふりかえった上で、難民等に対する日本語教育人材について理解するワーク（特別な配慮、他分野とは異なる資質・能力、初等教育を受けられなかった人々、国籍国等をやむなく離れることになったショックや、迫害などの体験による極度のストレス状態など、精神的に不安定な状態にある人々への理解など） - 本研修の「4つの到達目標」を理解するワーク
演習1	- 積極的傾聴とは（カール・ロジャーズの思想、3つの「きく」（聞くhearing、聴く（active）listening、訊くasking） →以降、研修において、自身が「きく」際、どの「きく」のモードで聞いているかを意識 - ロジャーズの3原則（共感的理解、無条件の肯定的関心、自己一致） - 積極的傾聴のワーク
演習2	インシデント・プロセス法によるワーク（講師からの事例提供→質問による情報収集→個人ワーク→グループワーク→全体共有→グループワークでのふりかえり）
演習3	- コルブの経験学習モデルを踏まえた上で、難民等に対する日本語教育を考える（自分自身を問う：省察の必要性、他者の声から学ぶ：考えの飛躍の可能性を理解） - パターンランゲージの記述方法（CPS）による＜わざ＞の記述を行うワーク - Context：問題が生じやすい状況（文脈）や条件、Solutionを実践するとよい状況 - Problem：Solutionに書いたことをすると、どのような問題が解決・解消するのか - Solution：この領域で実践を始めようとする人に、何が大切だと伝えたいか
演習4	- これまで学んだことのふりかえり（個人ワーク、グループワーク） - アドバイスのワーク（難民の方に日本語を教えることになった人がいると仮定、相談に対してどんなことばを返すか言語化） - パターン・ランゲージの記述を通じたまとめ - 最終レポート作成に向けて



▲演習の様子

3. 事業内容

3.3. 各研修の概要（演習特1）

【演習特1：日本語教育の実践の現場の見学】（担当：田中美穂子）

教室見学

難民等を対象とした日本語教育の現場（さぽうと21のオンライン形式の教室）を見学し、見学後に「教室見学記録」を作成
※見学、記録作成ともに研修時間外に実施

振り返り

後日、振り返りの時間（2単位時間）を設け、グループで以下①②について話し合う。（「教室見学記録」の活用）

- ① 見学した授業の内容・所感・疑問点
- ② 見学した実践のどの点がどのように「4つの到達目標」に関わるか

見学した実践（＝他者の実践）を難民等に対する日本語教育に求められる視点を記述した「4つの到達目標」と結ぶ試みを通して、「4つの到達目標」の具体的な内容理解と実践における意識化を図る。また、これにより新たな視点及び問題意識をもって実習（＝自己の実践）に臨めるようにする。

実習へ

3. 事業内容

3.3. 各研修の概要（演習特2）



【演習特2：難民当事者との対話】（担当：田中美穂子、大室文、栗又由利子、和田貴子）

対話 (2単位時間)	難民的背景を有するゲストスピーカーから、これまでの歩み、現在の生活、今後の展望等に関する話をうかがい、当事者の生活段階でどのようなニーズや困りごとがあったか/あるのかを知る。 ◆会場：東京都、栃木県小山市、愛知県名古屋市、大阪府大阪市、オンライン ◆ゲストスピーカー： のべ17名 各会場のファシリテーションを中核コーディネーター及び地域コーディネーターが担当
課題レポート 第一稿	テーマ「難民当事者との対話は、自身の日本語教育実践にとってどのような意義があるか」 当事者との対話から何を学んだかを整理し、その学びを自身の難民等に対する日本語教育実践や難民等以外への日本語教育実践においてどのように活かすかを言語化し提出（1200字）
振り返り (2単位時間)	第一稿をグループで読みあい、受講者間でコメント 各担当者もレポートにコメントを入れ、受講者にフィードバックを実施
最終レポート	他者からのコメントを参考に、第一稿を推敲し、最終稿（1200字）を提出

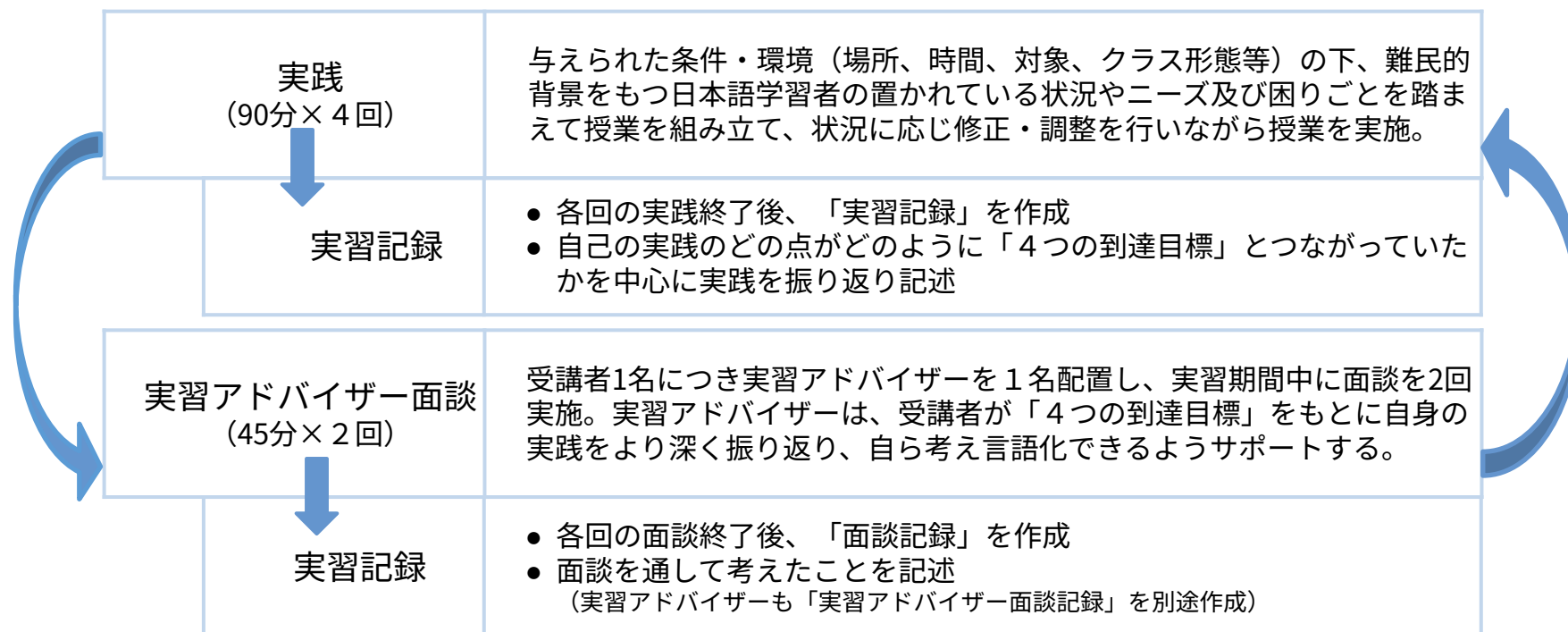
実習へ

①当事者との対話を通して、講義で学んだ知識と結びつけながら難民等について理解を深める。②当事者との対話から何を学んだのかを整理し、その学びを自身の難民等に対する日本語教育実践や難民等以外への日本語教育実践においてどのように活かすかを言語化する。

● 事業内容

3.3. 各研修の概要（実習）

【実習：難民等への日本語教育実践】（担当：田中美穂子、大戸航、森戸規子、西山陽子ほか）



自己の実践を、難民等に対する日本語教育に求められる視点を記述した「4つの到達目標」の枠組みで捉え直し、「次なる実践」に活かしていく。（「次なる実践」は、難民等の日本語教育に限らず、難民等以外に対する日本語教育をも含む。）

3. 事業内容

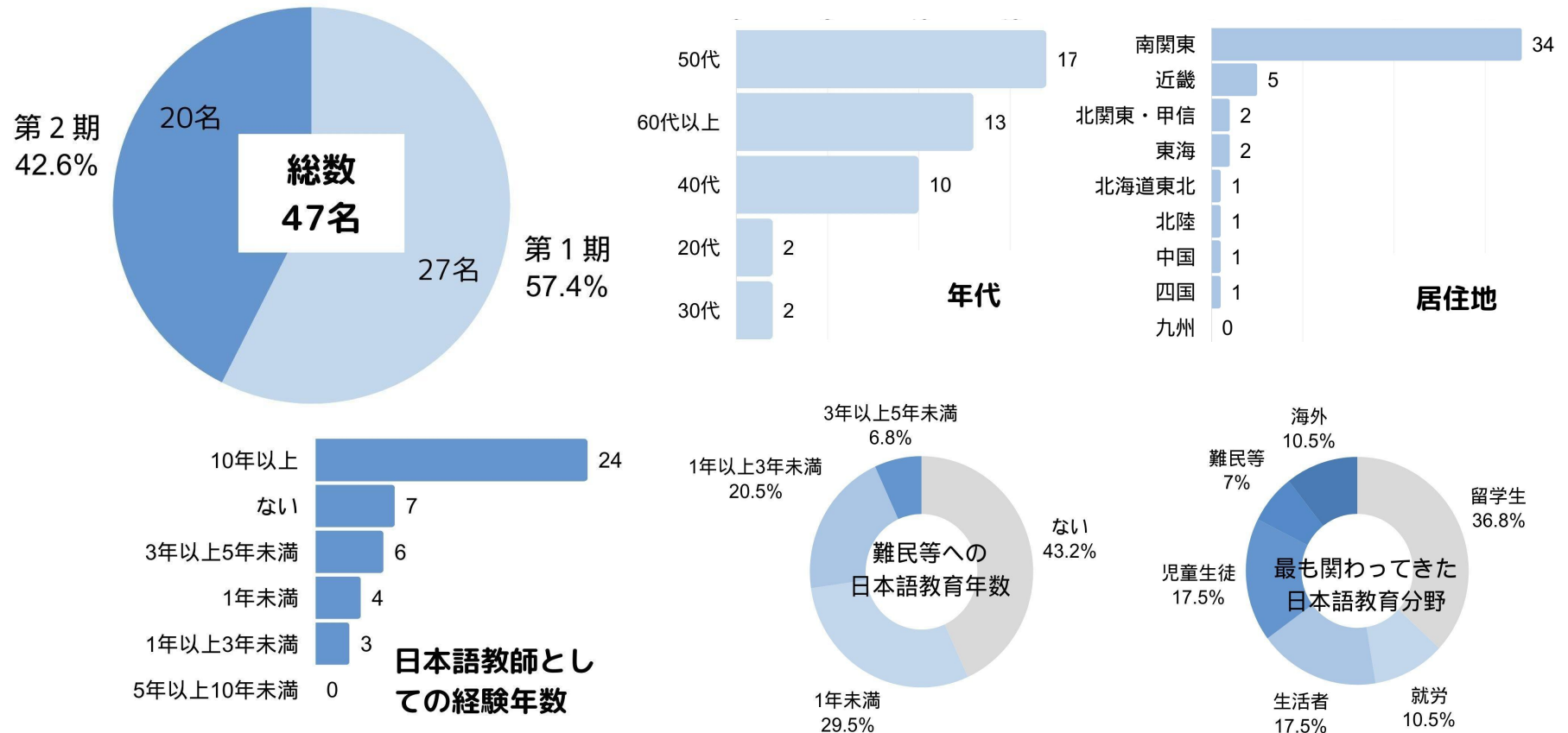
3.4. 募集・受講者・修了者の情報

募集方法	先着順の受付とし、オンラインフォームで申し込みを受け付けた。チラシを作成し、さぽうと21のウェブサイト以案内を掲載。日本語教師が多く参加するメーリングリスト、さぽうと21の既存の日本語教師ボランティア、各地の国際交流協会等や難民に携わる支援団体、なんみんフォーラムのネットワークを通じて周知を行った。
募集期間	募集開始：2023年6月21日（水） 第1期締切：7月1日（月） 第2期締切：10月21日（月）
受講料	15,000円
応募条件	難民等への日本語教育を学びたい日本語教師、全講座参加可能な方優先
受講者数	第1期：28名 第2期：23名
修了者数	第1期：27名（96%） 第2期：20名（87%）※2期を合わせた平均約92%
修了条件	講義・演習出席率（欠席時は補講受講可）100%、教育現場見学及び実習への全参加、レポート・記録など全課題提出

3. 事業内容

3.4. 募集・受講者・修了者の情報

【修了者について】



※研修参加数及び居住地以外は修了者47名中44名のアンケート回答に基づくもの。

3. 事業内容

3.4. 研修前後のフォローアップ体制

研修前後

- 毎回の講義終了時（12時40分）に、すぐに閉室とせず「立ち話の時間」を設けた
- 毎回提出の振り返りシートは総括・中核コーディネーターにて内容を確認し、必要に応じてフォローした（研修受講中に自身で答えがみつかるであろうものも多く、逐一の回答はしていない）
- 演習特1（日本語授業見学）、演習特2（難民当事者との対話）、実習などは、受講者の内省を促すために、他の受講者とのやりとりに重きをおき、中核コーディネーター、地域コーディネーター、実習アドバイザー等も伴走的な役割に徹した

研修終了後

- 「にほんごぷろぼの」にて、セミナーや研修等の情報を提供している
- 「ぷろぼの勉強会」と称して、第1期終了時の2023年10月25日（水）19時半－20時半に、補完的保護の制度と日本語教育について学ぶ機会を設けた。今後も「難民」「日本語教育」をキーワードとした「学びの機会」を提供していきたい

※研修終了後は、①引き続き、「にほんごぷろぼの」に参加して日本語支援にあたる ②「にほんごぷろぼの」に参加して求人情報や研究会情報等を得る ③「にほんごぷろぼの」は退室し、情報提供のみ受ける について、各自判断にて団体とのやり取りを続けていく予定

4. 事業評価概要

4.1 評価の観点及び検証方法：インプット・アウトプットについて

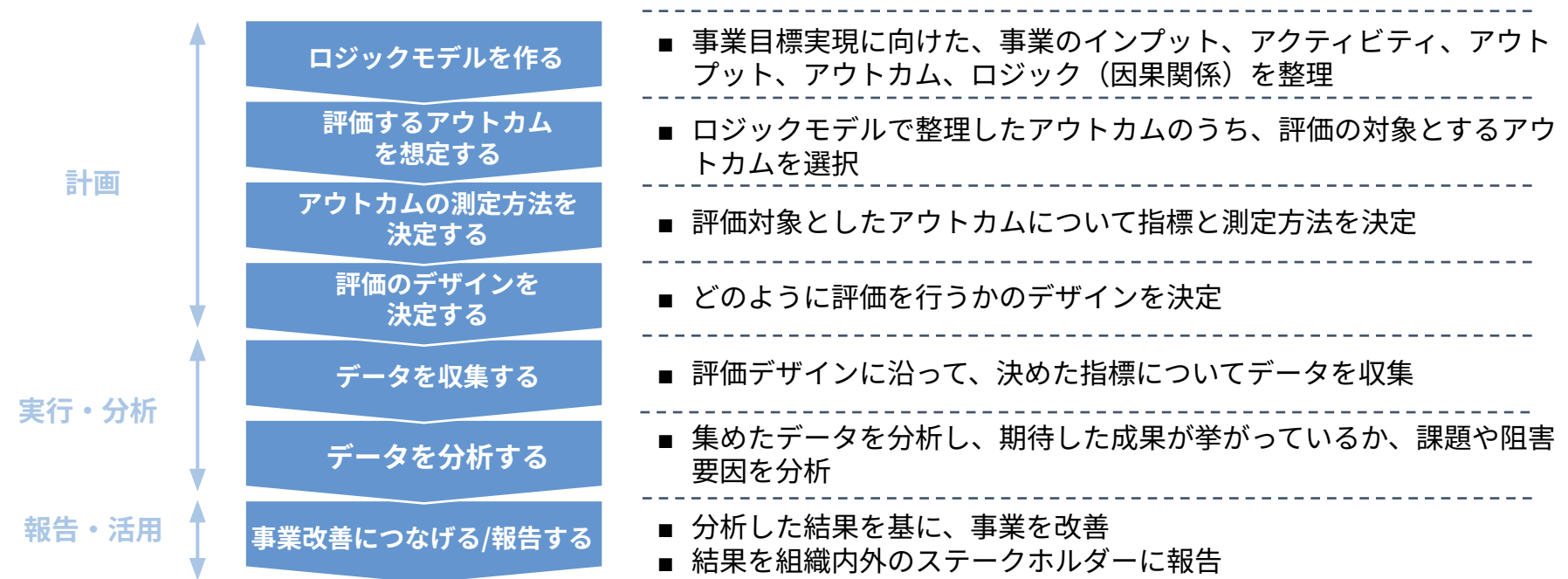
ロジックモデル作成前に、事業の目的、ステークホルダー、アクティビティ、インプット、アウトプットを整理

	目的	ステークホルダー	アクティビティ	インプット	アウトプット
1	難民の自立支援団体の知見を活かして、難民的背景をもつ日本語学習者を多視点から理解し、対人援助としての日本語教育の姿勢をもち、有用な日本語教育を行うことのできる日本語教育人材を育成すること	受講者	研修プログラム	受講料15,000円/人 受講者数総数 研修時間（総計）	【目標値】 研修実施地点数（4か所） 研修修了者数 研修実施者 研修修了率（80%） 受講者の自己評価
2	難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、実習できる場、研修終了後も実践を重ねることのできる日本語学習の場をつくりだすこと	受講者	難民等への日本語教育を行う実践の場「にほんごぶろぼ」運営事業	受講回数 受講者数 講師人数 実習アドバイザーの人数	【目標値】 研修受講者の実践の場への参加率（100%） 実践の場への学習者の参加人数（20名）
3	難民的背景をもつ人々が日本全国に居住する現状をふまえて、東京近郊のみならず、全国的規模で難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材を発掘し、育成すること	受講者	研修プログラム	受講者数	受講者の活動拠点数（都道府県）
4	難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、互いの知見を共有し、長く本分野に関わり続ける意欲を維持できるようプラットフォームを構築すること	さばうと21 中核コーディネーター 研修プログラム地域担当 つどいば参加者	難民等への日本語教育人材が互いの知見を共有する場「難民等への日本語に携わる日本語教師のつどいば（集いの場）」運営事業	つどいば運営（人数・時間・参加者等）	研修受講者のつどいばへの参加率 つどいばへの参加者数、さばうと21からの投稿数、つどいば参加者からの投稿数、交流機会（セミナー、ワークショップ）、交流機会への参加者数
5	全国各地に、難民等への日本語教師【初任】研修の実施経験をもつ個人もしくは団体を育成し、それら個人もしくは団体（さばうと21を含む）が、難民等への日本語教育の拠点、難民的背景をもつ方々の日本語教育の相談窓口として認知されるようになること	さばうと21、中核コーディネーター、研修プログラム地域担当、講師およびその関係先 さばうと21、中核コーディネーター、地域コーディネーター、講師	研修プログラムへの拠点先の関与、相談窓口・サービス情報を受講者へ共有、ウェブサイトで当該事業を公開 研修プログラム	相談窓口・サービス情報の共有、ウェブサイト掲載 新規研修実施者の数、謝金、講義時間（総計）	受講者の数の増加（過去事業との比較）、相談窓口・サービス情報の共有とその有用性への評価 新規研修実施者による講義の提供回数 新規研修実施者の講義補佐・学習機会回数

4. 事業評価概要

4.2. 評価の観点及び検証方法：評価の方法について

今回、インパクト評価手法を用い、ロジックモデルを作成のうえ、目標となるアウトカムを短期・中期・長期に分けて設定し、今期評価を行うアウトカムに対し、アンケートにより受講者へ与えた変化の評価を実施

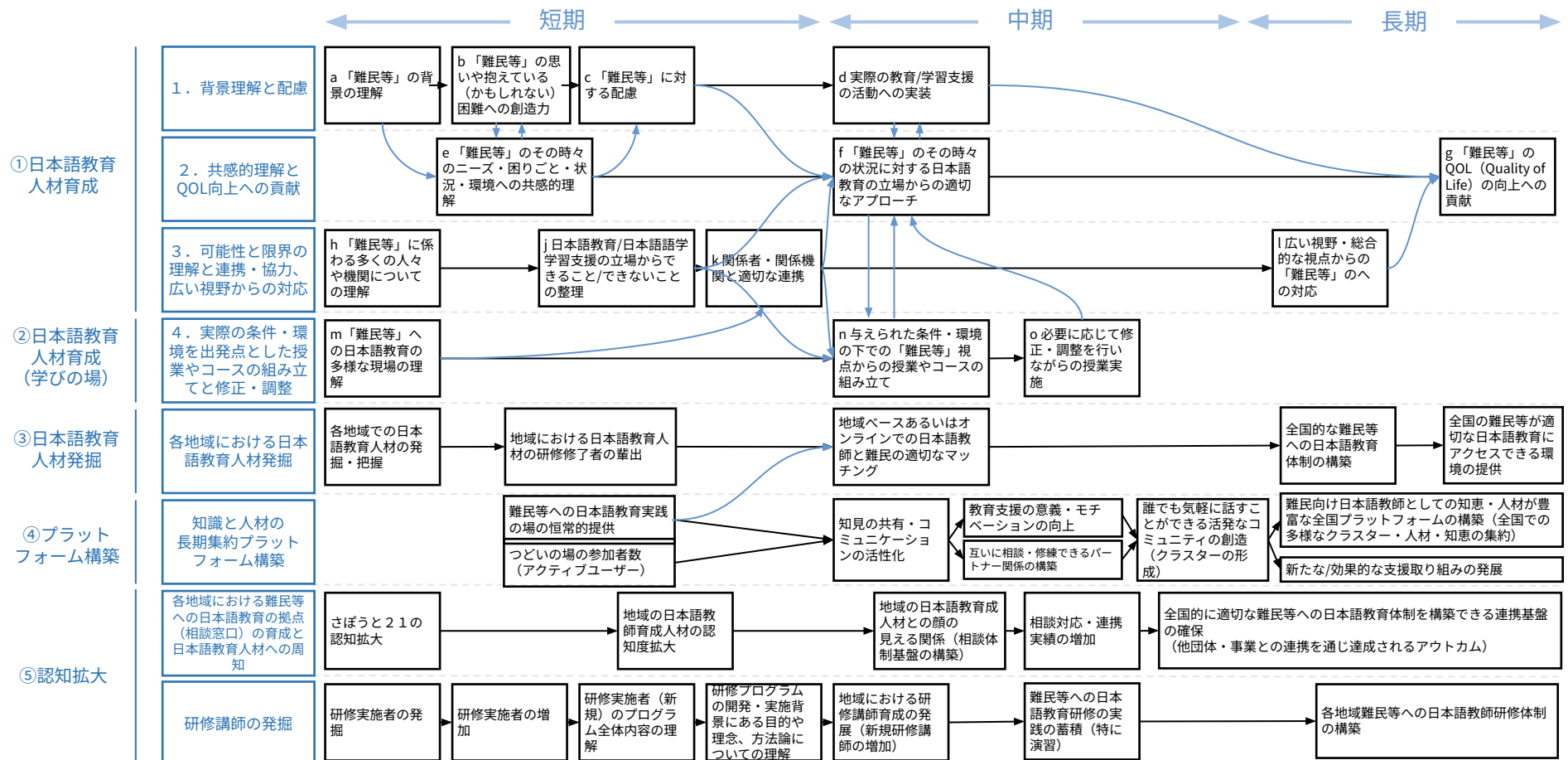


社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ（Social Impact Management Initiative, SIMI）の発行する社会的インパクト・マネジメント・ガイドライン（Ver. 2）に則り、インパクト評価を実施

4. 事業評価概要

4.1. 評価の観点及び検証方法：ロジックモデル及びアウトカム

さばうと21や関係者がこれまでの経験や知見を踏まえて議論を重ね、さばうと21を通じて創出する短期・中期・長期の価値を描画

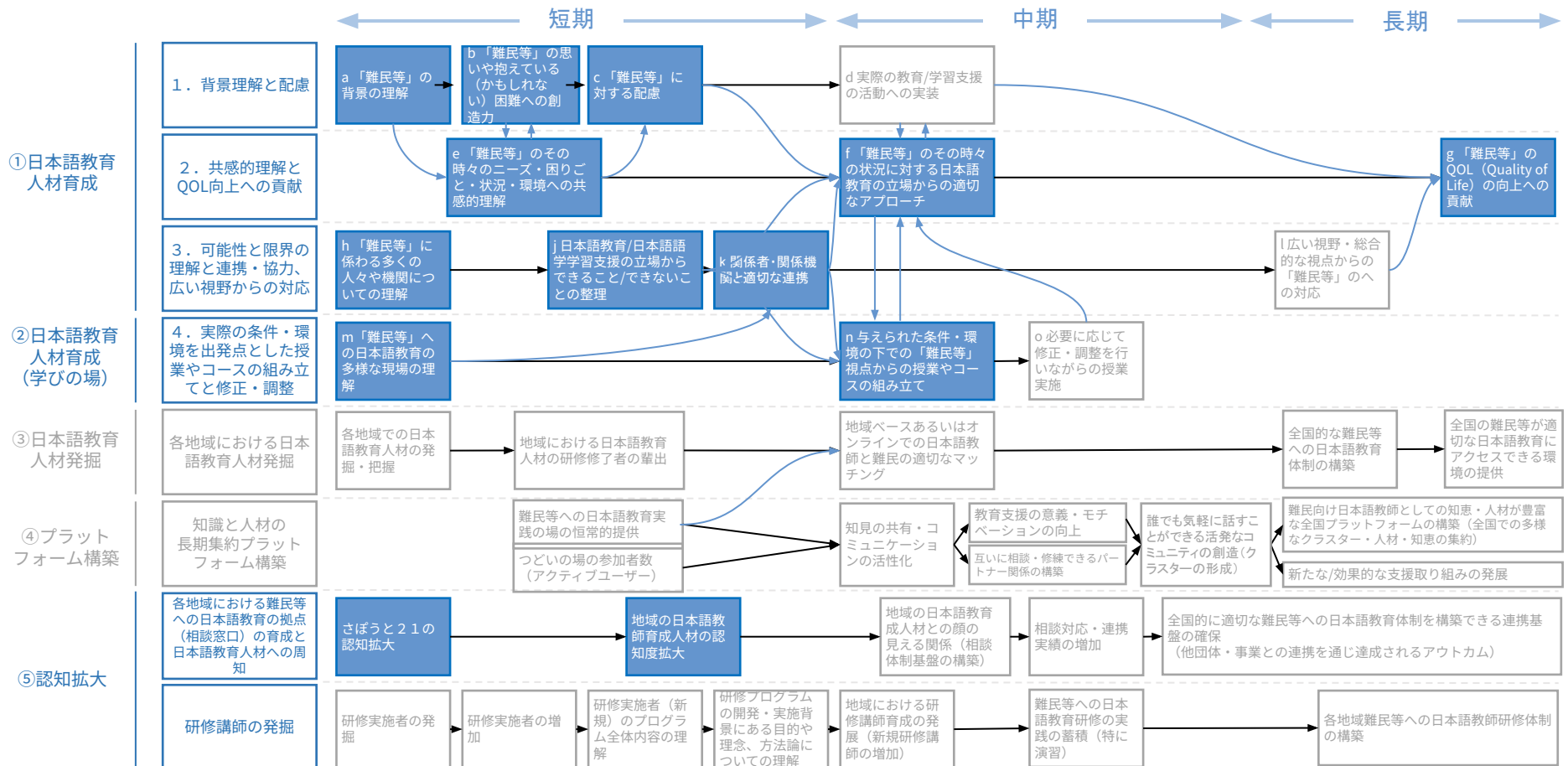


4. 事業評価概要

4.1. 評価の観点及び検証方法：本事業で評価するアウトカム

難民等へ日本語教育を実施する日本語教育人材の育成が主な目的であることから、本事業の研修受講者に焦点を当て、かつ比較的短期的に達成しうるアウトカムを受講者アンケートの評価対象とした。分析結果は、総括・中核コーディネーターと議論しながら、外部評価委員がとりまとめたものである。

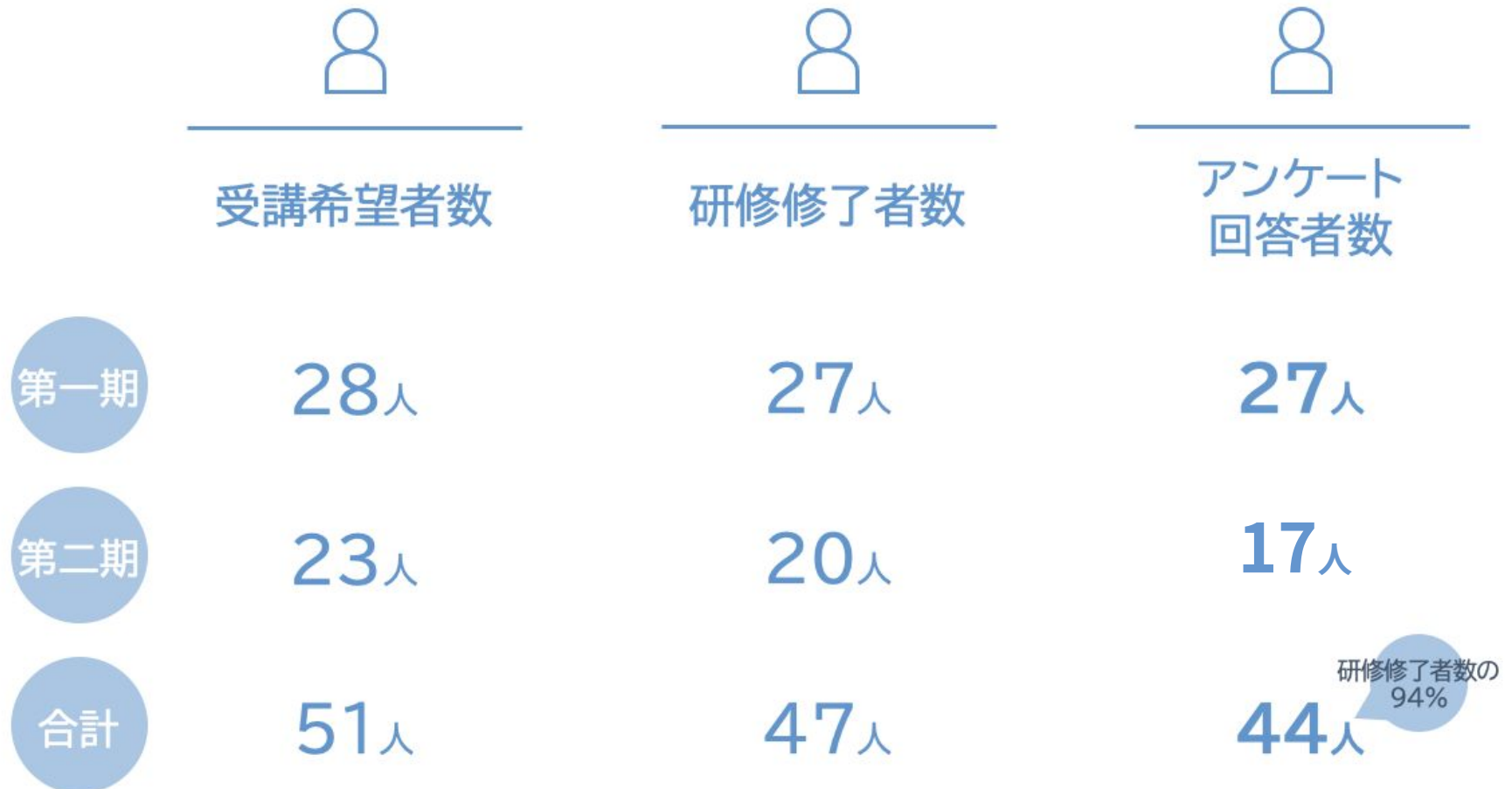
■：今回評価対象とするアウトカム



4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：アンケート回答状況

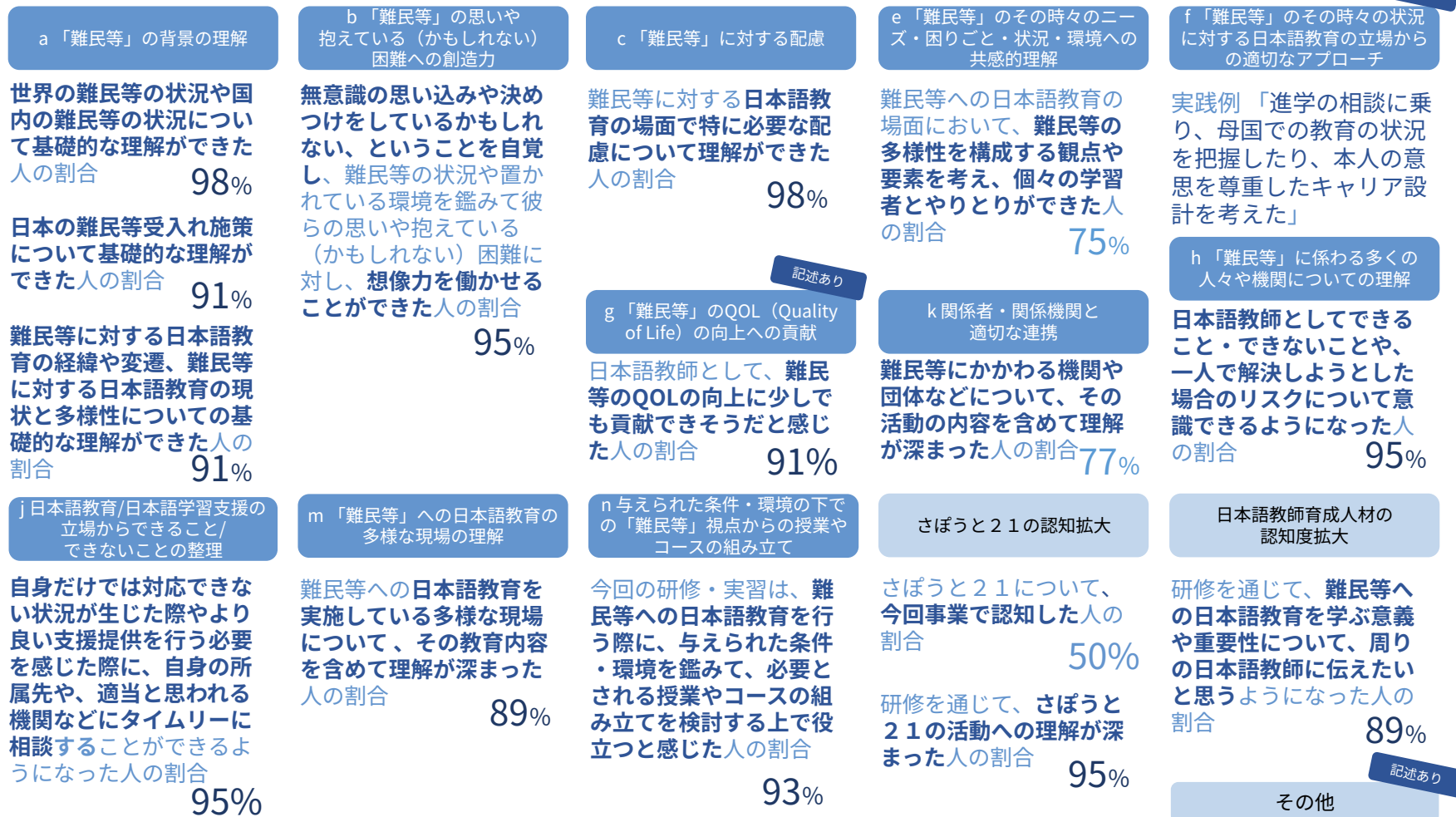
- ・今回事業に参加した受講希望者全51名のうち、研修を修了した47名に対しアンケートを実施
- ・アンケート回答者は47名うち44名（回答率約93%）



4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：集計結果

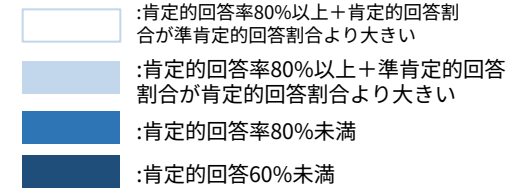
ほぼすべてのアウトカムに対して、90%を超える肯定的回答がみられた。一方で、QOL向上への貢献など中長期的アウトカムは、短期間での達成は難しく、70%台にとどまった。



4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：評価結果ヒートマップ

難民等の背景など基礎的知識に関しては好ましい変化が見られたが、実践面でのニーズ等の把握やそれに対する適切な対応について2023年度においては比較的達成率が低い。



a 「難民等」の背景の理解	世界の難民等の状況や国内の難民等の状況について基礎的な理解		無意識の思い込みを自覚し想像力を働かせることについて確信できるほど成果にはつながっていない様子
	日本の難民等受入れ施策について基礎的な理解		
	難民等に対する日本語教育の経緯や変遷、難民等に対する日本語教育の現状と多様性について、基礎的な理解		
b 「難民等」の思いや抱えている（かもしれない）困難への創造力	無意識の思い込みや決めつけをしているかもしれない、ということを自覚し想像力を働かせること		学習者とのコミュニケーション機会や研修回数の制約上、ニーズ等くみ取り学習支援につなげることに課題がみられる
c 「難民等」に対する配慮	日本語教育の場面で特に必要な配慮についての理解		
e 「難民等」のその時々々のニーズ・困りごと・状況・環境への共感的理解	日本語教育の場面において、難民等の多様性を構成する観点や要素を考え、個々の学習者とやりとりする		
f 「難民等」のその時々々の状況に対する日本語教育の立場からの適切なアプローチ	e 「難民等」のその時々々のニーズ・困りごと・状況・環境への共感的理解の実践		中長期的なアウトカムだが、研修を通じて貢献できそうな所感を得ている様子
g 「難民等」のQOL（Quality of Life）の向上への貢献	日本語教師として、難民等のQOLの向上への貢献		
k 関係者・関係機関と適切な連携	難民等にかかわる機関や団体などの活動内容等理解		
h 「難民等」に係わる多くの人々や機関についての理解	日本語教師としてできること・できないことや、一人で解決しようとした場合のリスクについての意識		難民等にかかわる機関や団体などの活動内容等理解に若干課題がみられる
j 日本語教育/日本語語学学習支援の立場からできること/できないことの整理	自身だけでは対応できない状況が生じた際やより良い支援提供を行う必要を感じた際に、自身の所属先や、適当と思われる機関などにタイムリーな相談		
m 「難民等」への日本語教育の多様な現場の理解	難民等への日本語教育を実施している多様な現場における教育内容等の理解		
n 与えられた条件・環境の下での「難民等」視点からの授業やコースの組み立て	今回の研修・実習の難民等への日本語教育を行う際に必要とされる授業やコースの組み立てを検討する上での役立つ度合		認知度が低く、参加者の半数は認知していなかった
さばうと21の認知拡大	さばうと21についての認知		
	研修を通じたさばうと21の活動への理解		
日本語教育育成人材の認知度拡大	難民等への日本語教育を学ぶ意義や重要性について、周りの日本語教師に伝えたいと思う気持ち		

4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：アンケート記述抜粋

「寄り添うアプローチができた」「偏見を持たずに接することを念頭におくようになった」などの声が挙げられている。一方で、「あまり困りごとを引き出すことができず解決が必要な問題の対応を行うことができなかった」などの声も挙げられた。

f 「難民等」のその時々状況に対する日本語教育の立場からの適切なアプローチ

 できるようになったと回答した方のコメント

入管へ行くので休むとか突然授業に出られない事情ができて辞めてしまうケースがありました。なぜ休んだり辞めたりしてしまうのか自分を責めてしまうことがありますが、さまざまな事情で生じる可能性があることがわかりました。原因を追及しすぎないように、心理的に追い詰められなくなりました。

例えば10代の学習者が日本の中学、高校で勉強したくても言葉の壁があったり、またその壁以前に集中して勉強できない心理的、環境的問題がある場合もある。それらのことを理解し、時にはゆっくり本人の様子を見ながら、寄り添うようなアプローチができていと思う。

難民当事者の日本語学習に対する消極的な姿勢について、ご本人のこれまでの学習歴や成育歴も踏まえ、またメンタル面で不安定であることなども考慮に入れ、日本語の指導者としておおらかに受け入れられるようになった。

 まあまあできるようになったと回答した方のコメント

他国へ避難していた時の話をしていたので、傾聴した。現在の生活状況で足りないことや不安を聞いた。学習者に必要なものを買える場所などの質問があったので、調べて答えた。

短い実習ではありましたが、実習までに「この人はこうだ、という決めつけをしてはいけない。個人を見ることが必要。」だと教えて頂いていたので、学習者さんへの偏見をもたずに接し、またその際は様々な経験をされていることを念頭におくようにしました。

 あまりできるようになっていない・ほとんどできるようになっていないと回答した方のコメント

実習で担当した学習者から、あまり困りごとの話題を引き出すことができなかったのも、解決が必要な問題の対応を行うことができなかった

「難民等の多様性を構成する観点や要素を考え」という点では、実習で学習者とのやりとりがなかった

四回の実習だけでは経験として足りず、できるようになったかどうかは分からない

4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：アンケート記述抜粋

「自信がなかったが、今はいろいろな工夫ができるようになった」「本研修で学んだことを活かせば、少しでも貢献できそうだと感じた」との声が挙げられている。一方で、「自分」にはまだ支援する力が不足している」「4回の実習経験しかなく貢献できるとは言い切れない」などの声も挙げられている。

g 「難民等」のQOL（Quality of Life）の向上への貢献



貢献できそうだと感じたと回答した方のコメント

難民の背景を持つ方々に研修前から日本語を教えていたのですが、やはり日本での生活をがんばりたいと期待して学びに来る方が多いと感じていました。研修前は、自分の知識の無さから、どのようにそこに貢献できるのか分からず自信がなかったのですが、今はいろいろな工夫ができるようになった。

難民等の方が日本社会で生活し、自己実現を図るうえで日本語習得は最優先の課題です。日本語指導を通して、彼らが日本社会に一步踏み出せる支援ができると考えています。

「QOL」について初めは難しく考えていたが、（学習者の）話を聞くうちに身近な「できること」や「ニーズ」に関連して、小さな一歩をたいせつに積み重ねるところから関わっていくことを学んだ。



まあまあ貢献できそうだと回答した方のコメント

さぽうと21の教室見学で教師と学習者が学んでいる様子を見たり、実習で実際に難民等の日本語学習に関わったりして、日本語教師として難民等のQOLに貢献したいと思ったし、本研修で学んだことを活かせば、少しでも貢献できそうだと感じた。ただ、「日本語教師として」の自身のスキルにはまだ課題があると感じる。

実習中のことですが、学習者の方から毎回肯定的な評価（先生は私の話をよく聴いてくれる、役に立つ等）を言ってもらえていたので、まあまあできたのではないかと感じた。



あまり貢献できるとは感じなかったと回答した方のコメント

難民等の方々の社会参加は社会的にも、言語面においてもハードルが高い。自分にはまだ、支援する力が不足していると思う

難民等と実際に接する機会が全然無い

4回の実習の経験しかないため、貢献できると言い切れない

4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：アンケート記述分析

思った以上に時間を費やして取り組まなければいけなかった」との声も挙げられるが、「総合的に理解を深めることができた」「教師の在り方に対する学びになった」などの声が挙げられている。

その他（研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたこと）



受講者よりいただいた様々なご意見

講師の方々が様々な場で難民等に関わっていたため、難民等について総合的に、色々な面から理解を深めることができました。難民等の立場から体験的に考えた回も色々な気づきがあり、印象に残っています。今後、難民等の学習者に関わる際には、その時に得た気づきをヒントにかけられが置かれている状況に想像力を働かせたいと思いました。また、研修中に様々な実践例を伺えたことも大変参考になりました。

様々なことを知り、考えた研修でしたが、最も印象に残っているのは講義や演習での難民当事者のお話だと思います。自分とは国籍や環境が違う人でも、感じることも、大切なことは結局同じなんだと気づけました。

難民的な背景を持つ方の語りを実際に聞くことができたのは大変良い機会でした。どのような経緯で日本に来たのか、また来日後の歩みを知ることで、その方の抱える問題が浮き彫りになり、教師にできる具体的な日本語教育支援のアイデア、（例えば漢字学習の支援方法など）を考えることができたと思います。

研修前はこんなに時間を取られるものとは思いませんでした。講義を受けるのもレポートをまとめるのも集中して取り組まなければならないものでした。それでも講義内容には難民に対する考え方や接し方や背景やキャリアプラン等新しい知識が次々に提示され、興味深いと思いながら毎回参加していました。この研修で自分自身は細く長く関わることの意義を学びました。これからも微力ながら難民の方々の支援を続けようと思っています。

研修の中身もさることながら、グループワークや振り返りなどのやり方が、教師の在り方に対する学びになった。

日本語学習者に向き合うときに、先入観を持たず向き合うことの大切さを改めて理解しました。そのために、こちらもあるままの自己を表し、向き合わなければならないとわかりましたが、実はこのことは勇気があることだということも理解できました。

毎回新しく学ぶことが多く新鮮でした。今年度の研修が前期・後期に分かれていたため参加者の人数も多くなく、ブレイクアウトルームで皆さんと話す機会、ワークショップを少ない人数で行うことができた。忙しい日程だったが最後には話したいと思った。

4. 事業評価概要

4.2. 受講者アンケート分析：評価委員コメント

考察

- ・今回、さぽうと21による日本語教育人材育成プログラムが研修受講者に対し、難民等の背景や周辺支援機関・団体の存在や役割、日本語教師としての在り方など知識を育み、また実践の場を提供することで、どの程度受講者の理解が深まったか、あるいは実践を経てスキル向上に貢献したのかを評価した。
- ・**全体的に、座学における基礎的な情報の理解では、およそ90%を超える受講者が理解ができたと感じていることがわかった。**
- ・特に、アウトカム「a 難民等の背景の理解」や「c 難民等に対する配慮」においては最も効用の高い肯定的回答が得られた。
- ・また、長期的アウトカム「g 難民等のQOLの向上への貢献」においては、**QOLに貢献できそうか、という質問に対し、「自信はなかったが、工夫をして貢献できそう」「本研修を活かして貢献できそう」など、多くの肯定的意見があげられた。**
- ・一方で、「e 難民等のその時々ニーズ・困りごと・状況・環境への共感的理解」や「j日本語教育/日本語語学学習支援の立場からできること/できないことの整理」のアウトカムのような**実践の場で必要となるスキルにおいては、研修回数の制約やスキルの未熟さなど様々な理由から、取り組むハードルが高い**ことが明らかとなった。
- ・「さぽうと21の認知拡大」に関し、今回研修を受けた人の約半数がさぽと21を認知していなかった。これまでに**関係性がなかった多くの方へリーチすることができたことは成果である一方、依然として認知拡大のための取り組みが必要だ**ということも明らかとなった。

留意事項・課題

- ・今回の評価においては、**あくまで受講者の主観的判断に基づくアンケート調査**を実施した。
- ・そのため、**客観的に個人の能力の向上や変化を捉えるには不十分なデータおよび評価結果である点**、留意しなければならない。
- ・加え、**今回の評価では検証しきれなかったアウトカムがあることやプログラム実施環境など多様な視点で事業を評価しているものではなく、事業の一側面を捉えた内容である。**そのため、事業改善のために評価を継続する上では**より広範囲なアウトカムの評価についても検討する必要がある。**
- ・今後、更に日本語教育人材としての成長を測定するための評価軸の検討や他者評価の実施など**当該事業におけるインパクト評価アプローチの発展が期待される。**

4. 事業評価概要

4.3. 最終レポート分析（対象・方法・結果）

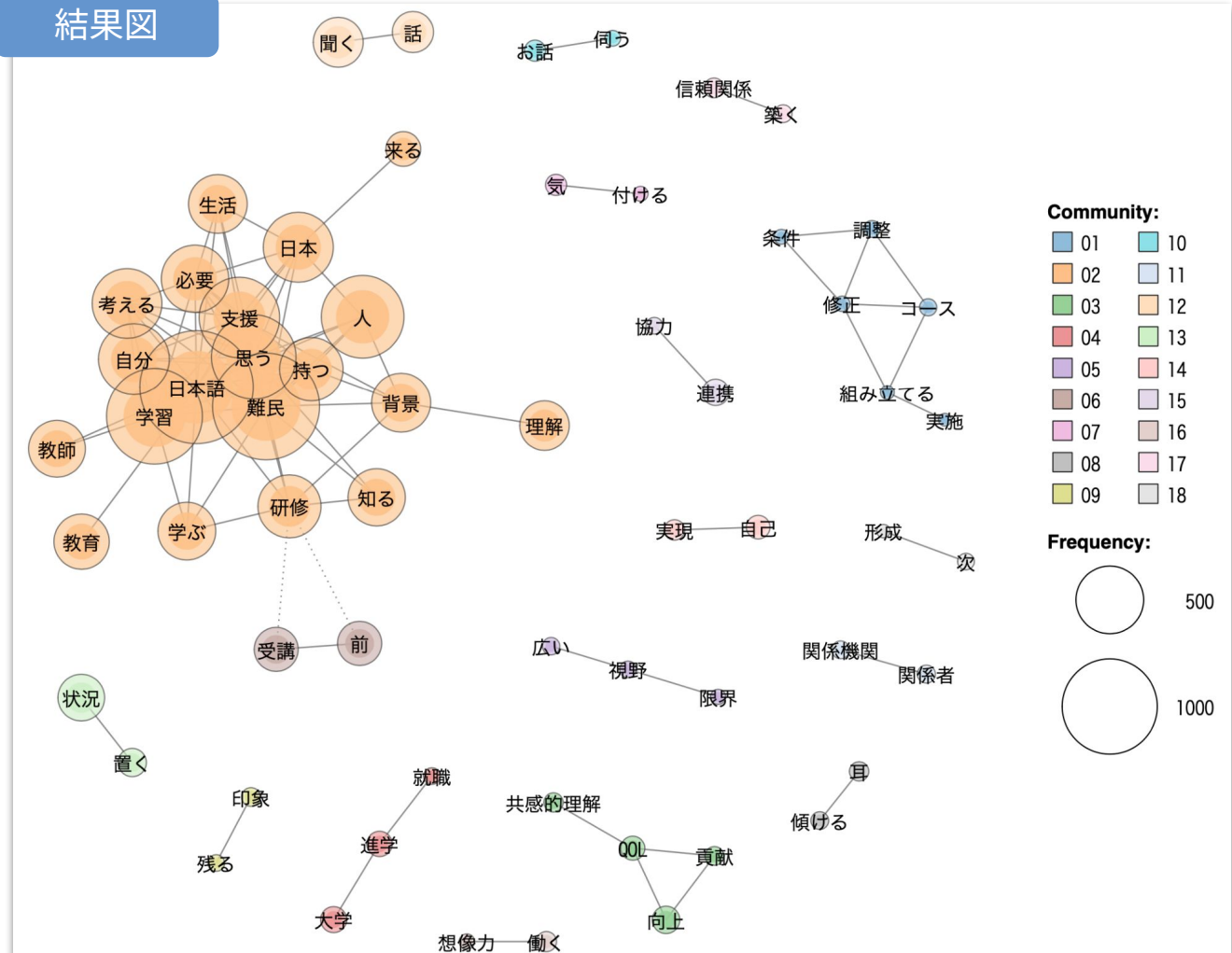
分析対象

1期生、2期生が執筆した最終レポートの全体を一つのファイルに結合（ただし、レポートタイトル、氏名、巻末資料、研修全体の到達目標をそのまま見出しとしていたり引用したりしている部分などを予め削除）

分析方法

KH Coder3を用いて最終レポートの全体についてテキストマイニングを実施し、共起ネットワーク図を作成（右図）

結果図



4. 事業評価概要

4.3. 最終レポート分析（研修を通じて受講者らが得た視点・観点・考え方）

研修全体を通じて行ったことへの言及

- 【受講】【前】は【知ら】なかったが、【研修】を通じて【学ぶ】ことで、【日本】に【来】、【日本】で【生活】している【難民】・【難民】的【背景】を【持つ】【人】について【思い】、【背景】を【知っ】たり【理解】したりし、また、【日本語】【教育】の立場から【日本語】【教師】として【自分】で【必要】な【学習】や【支援】について【考え】た。（実際に難民当事者の）【お話】を（実際に）【伺】った。

「4つの到達目標」やそれに関わることへの言及

- 目標1: 【想像力】を【働か】せる
- 目標2: 【共感的理解】により【QOL】【向上】に【貢献】する、【耳】を【傾ける】、【話】を【聞く】
- 目標3: 【限界】の中で【広い】【視野】を持つ、【関係者】・【関係機関】、【連携】・【協力】
- 目標4: 【置か】れている【状況】、【条件】の中で、【コース】を【修正】・【調整】しながら【組み立て】、【実施】する

それ以外のクラスター

- 【信頼関係】を【築く】、【大学】【進学】や【就職】、【自己】【実現】、【次】を【形成】する、【気】を【付ける】（→何に？）、【印象】に【残る】（→何が？）

「気を付ける」「印象に残る」の具体的内容（最終レポートから抜粋）

気を付ける	• 問題をそのままにして、硬直化させることにつながらないように（気を付ける） • 現状だけで彼らの進路を狭めることがないように（気を付ける） • 個人的なことにあまり立ち入らないことに（気を付ける） • スケジュールをこなすことが目的にならないように（気を付ける） • 「こんなにやってあげているのに」みたいなことにならないように（気を付ける） • 同じ国だからって安易にひとくりにするのは、本当に（気を付ける）
印象に残る	• 「学習の継続には、本人が日本語の重要性や自分に足りないものを自覚することが大切」という当事者の言葉 • 「本人が表明したニーズじゃない、感じていないニーズについて、支援者がいくらニーズを言っても、意味がない。うまくいかない。押し付けをすると関係性が壊れる。時期を待つのが大切。」という講師の言葉 • 「本人がもっと学習が必要という気持ちが高まったときに一緒に頑張れるように、とにかく教室に来てもらい、少しずつでも学習を継続できるようにする」という講師の言葉 • 1) 心で聞いて頭で考える。相手の話を聴いて同調ではなく共感し、同時に冷静にロジカルに状況判断する。2) 自らの職務とフレームワークを意識する。3) 半歩斜め後ろを伴走する。相手の生活・人生を長く支え続けることが大切。すぐに結果が出なくても、長期的に解決できることもある。4) 相手を知ることは自分を知ること。必要なら自分が変わる。 • 「難民認定を申請中の人にとって時間の過ぎ方は異なる」という講師の言葉 • 実際の経験として、日本語教師という立場に関わるにあたって、話を聞いて困りごとや困難について知ったとしても、あまりにもその分野が多岐に渡っていて、求められる全てに対応できるとは限らないということ

4. 事業評価概要

4.4. その他定量値による簡易分析

事業目的2

難民的背景をもつ人々が日本全国に居住する現状をふまえて、東京近郊のみならず、全国的規模で難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材を発掘し、育成すること

今期アウトカム

各地域での日本語教育人材の発掘、把握地域における日本語教育人材の研修修了者の輩出

考察

- 研修修了者の7割超は南関東在住者に集中し、**地域間の偏り**みられたが、**九州地方を除いては広域的な日本語教育人材の育成に繋がった。**
- 研修修了者の約40%は難民等への日本語教育経験がない、経験がある場合にもその半数弱は経験年数を1年未満であり（ただし自己申告）、難民等が最も関わってきた日本語教育分野と回答した人も7%（3名）に留まっており、**新規の人材発掘に繋がった。**
- 全国4カ所で当事者の話を聴くセッションを各期1回ずつ開催することができたことで、**東京近郊に住んでいない日本語教育人材へも対面で当事者と出会い、学ぶという機会を作ることができた。**

事業目的5

全国各地に、難民等への日本語教師【初任】研修の実施経験をもつ個人もしくは団体を育成し、それら個人もしくは団体（さぼうと21を含む）が、難民等への日本語教育の拠点、難民的背景をもつ方々の日本語教育の相談窓口として認知されるようになること

今期アウトカム

研修実施者の発掘（3名）、研修実施者の増加（1名）、研修実施者（新規）のプログラム全体内容や研修プログラムの開発・実施背景にある目的・理念・方法論についての理解

考察

地域の日本教育に経験の深い中堅以上（5～10年又はそれ以上）の日本語教師3名が、地域コーディネーターとして研修に参加。3名ともに講義・演習の実施に関わり、うち1名は2期の演習の講師を務め、研修経験をもつ人材の育成に繋がった。本研修の到達目標やその背景、研修の全体像への理解度、理論編の内容、演習での配慮や手法について、3名より肯定的回答を得ているが、1名は、演習講師を務めることについて、学びの継続が必要と回答。本研修で実習アドバイザーを務めた2名は過去年度の研修修了者であった。本事業では、過去年度に比べ研修修了者が増加しており（2019年度11名、2020年度19名、2023年度47名）、将来の研修実施者育成に繋がることが期待される。

地域コーディネーターの研修への関わり実績

演習講師数	1名（計5回）	演習課題へのフィードバック実績	3名（累計20回）
講義・演習実施補助者数	3名（累計33回）	実習アドバイザー数	1名（計10回）

4. 事業評価概要

4.4. その他定量値による簡易分析

事業目的 2

難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、実習できる場、研修終了後も実践を重ねることのできる日本語学習の場（名称：「にほんごぷろぼの」）をつくりだすこと

今期アウトカム

難民等への日本語教育を行える場を恒常的に提供する

考察

- 実習の場の提供数は188回に留まったが、**講義・演習すべてを修了した全ての受講者が、実習を終えることができた。**
- 「にほんごぷろぼの」のオンラインスペースへは、研修修了者全員の登録が達成できた。研修修了者のうち31名（回答者41名）がオンラインで日本語学習支援が可能と回答した。さぽうと21で日本語を学ぶ外国人学習者は延べ1,557人（2023年4月～2024年2月）。うち延べ1,030人はオンラインで参加している。研修を修了した日本語教育人材が、居住地に関わらず、恒常的に実践を継続することができるだろう。

事業目的 4

難民等への日本語教育を行うことのできる日本語教育人材が、互いの知見を共有し、長く本分野に関わり続ける意欲を維持できるようなプラットフォーム（つどいば（集いの場））を構築すること

今期アウトカム

「つどいば」の参加者数（アクティブユーザー数）

考察

- 目標の100名（研修受講者70名を含む）には達しなかったが、61名が「つどいば」に参加し、うち47名が研修修了生であった。
- オンラインプラットフォーム上では、研修修了生による自己紹介（延べ26回）や、研修講師による情報共有など（延べ38回）が行われている。95%以上の者が投稿を閲覧しているが、**研修修了生同士の知見や情報の交流は限られた。**今期はプラットフォームの立ち上げ段階に留まったものの、2023年10月23日に「学びの会」を1回企画し、研修修了生・受講生を含む30名が参加。**研修受講者の継続した学びや知見共有のニーズが伺える。**
- 日本語教師の中では解決しがたい課題等について、専門家等の助言を仰げることも目指しているが、2024年3月15日時点で、研修実施者（外部講師9名、総括・中核コーディネーター計4名、地域コーディネーター3名、実習アドバイザー3名）19名のうち9名、事業検討委員10名のうち6名（研修実施者と重複あり）と**難民支援等の専門家の参加は途上にある。**

5. 成果と課題

【講義】

成果

研修修了者へのアンケート結果や分析、最終レポート分析からは、研修のねらいである、「4つの到達目標」のうちの3つ（①背景理解と配慮、②共感的理解とQOL向上への貢献、③可能性と限界の理解と連携・協力、広い視野からの対応）について、受講者が知識や認識を深め、継続して学んでいく意欲に繋がったことが確認できた。

課題

- 受講者が**講義内容を消化するまでに時間を要する**場合がある。**オンライン講義は対面の講義と比べ、受講者同士や講師とのコミュニケーションが不足し、疑問を消化できていないおそれがある**。グループ演習を早々に実施するか、講義の内容に関して**少人数でコミュニケーションを深める時間を持つ**ことや、全国展開においても、地域（ブロック）ごとに受講者が対面で集まるといった**部分的な対面の場**も検討しうる。
- 講義内容を消化できない別要因として、90分の講義が2回続いたような日は、受講者にとって集中力が持続しづらかった可能性がある。講義の単位時間数の配分を見直す、講義の時間を分散させるなど、なんらかの方法で**受講者の集中力を維持しつつ効果的な学習を促す必要**がある。これ以上内容を減らすことができない講義もあるが、一部の講義はコンパクトなグループワークを入れ込むことも検討しうる。
- 受講者が**「4つの到達目標」と講義、講義と講義の関係性が見えにくいと感じる**場合がある。進行者が講義の冒頭に導入する、講義後に参加者で振り返る、講義録や教材を充実させることなどにより、受講者の理解をサポートできるだろう。

5. 成果と課題

【演習】

成果

- グループワーク時の受講者の様子や振り返りシートの記述から、演習を通じて「日本語を教え込む」ようなアプローチだけに囚われない、難民等を対象とした日本語教育のあり方・アプローチについて考えることができるようになった。難民等への「配慮」とは具体的にどのようなものなのか、積極的傾聴を行う／行おうとする意義はどこにあるのか、難民等の周囲の人々（子どもが通う学校の先生、就労先の同僚等）との間の調整においてどのようなことが可能か（逆に可能ではないのか）といった事柄について、受講者一人ひとりが自分自身のこれまでの日本語教育の実践をふりかえりつつ考えることができるようになった。
- できることだけでなく、できないことや限界について考える中で、関係者・関係機関との連携・協働の必要性や意義に関する理解が進んだ（到達目標③「可能性と限界の理解と連携・協力、広い視野からの対応」）。
- 具体的なトピックについて、受講者同士で意見を交換し合うなかで、「4つの到達目標」全てについて受講者がそれぞれに自分の考えを持つことができ、演習特1や特2、実習に参加していくのに必要な知識・技能・態度を涵養することができていたようであった。
- 講義の中で理解しきれない/腑に落ちない事柄について演習の時間に互いに話したり、講義の中で使われていたことばや考え方をを用いることで、講義内容の復習や定着促進の役割を演習が担ったという側面もあった。

課題

オンラインでのグループワークを効果的に行うことができるかどうかは受講者個々人やその都度のグループメンバーの組み合わせにもよる。➡ オンラインでのグループワークに関するインストラクションやオンラインツールの活用に関する情報提供などをより増やしたり、研修実施側が受講者の特性をさらに理解したりすることを通じて改善していくことが必要。

5. 成果と課題

【演習特1：日本語教育の実践の現場の見学】

目的（再掲）

見学した実践（＝他者の実践）を、難民等に対する日本語教育に求められる視点を記述した「4つの到達目標」と結ぶ試みを通して、「4つの到達目標」の具体的な内容理解と実践における意識化を図る。これにより、新たな視点及び問題意識をもって実習（＝自己の実践）に臨めるようにする。

成果

教室見学記録や本講のグループワークの受講者の様子及び振り返りシートの記述より、目的を概ね達成できたと思う。目的を達成できた要因の考察：授業見学の後、振り返りとして行ったグループワークでは、他者の実践（＝見学した授業における教師の教え方）についての論評ではなく、**見学した実践において担当教師がなぜそのように教えたり対応したりしたのか想像し考えることに重点**を置いた。このことにより、受講者の視点が**教え方の技術そのものではなく、授業を担当する教師や学習者が置かれている文脈や生活世界等の理解へ向けられ、教師のその教え方や対応が4つの到達目標のどの点につながっているのかを考える後押しとなった**と思われる。

課題

- 振り返りのグループワークにおいて、一部の受講者又はグループは他者の実践を4つの到達目標と結びつける作業が難しい様子であった。➡演習補助者（中核/地域コーディネーター）がブレイクアウトルームを巡回するに際し、目的の理解及び役割の明確化を図り、必要に応じてグループに介入できるようにする。
- 見学者がいることによる授業（特に学習者）への影響➡1対1の授業に多数の見学者が入ることのないよう、状況が許す限り見学の場を増やし見学者を分散させる。

5. 成果と課題

【演習特2：難民当事者との対話】

目的

- ①当事者との対話を通して、講義で学んだ知識と結びつけながら難民等について理解を深める。
- ②当事者との対話から何を学んだのかを整理し、その学びを自身の難民等に対する日本語教育実践や難民等以外への日本語教育実践においてどのように活かすかを言語化する。

成果 ①

【対受講者】

対話時及び振り返りでの受講生の様子や課題レポート、課題レポートにコメントを入れた担当者の所感を総合すると、本講の目的を概ね達成できたと考える。

- ①については、受講者の中には実際に難民等に会ったことのない者もいて、これまで講義等で**見聞きし想像してきた難民等像をいい意味で一旦壊して再構築する**機会となったようである。②については、課題レポート第一稿と最終稿執筆の間に、受講者同士が第一稿についてコメントし合う機会と、本講担当者からコメントをもらう機会を設けた。これにより、最終稿では**「当事者の話から知ったこと」の羅列を脱し、「学んだこと」へと記述が深化し、それらを自身が置かれた日本語教育の場でどのように活かすかをより明確に思考する**機会となった。このことは、難民等の日本語教育で得た視点が他の日本語教育の領域でも活かされようとしていることをも意味する。
- ①②以外の成果としては、本講が研修唯一の対面実施の場であり、オンライン授業を共にしてきた受講者が同窓会のように歓談する様子が見られ、**難民等に対する日本語教育人材が互いの知見を共有しつながるきっかけ**を提供できたと考える。

5. 成果と課題

【演習特2：難民当事者との対話】

成果②

【研修担当者の人材育成】

第1期では、主たる本講担当者（中核コーディネーター）が受講者の思考を深化させるためのコメント入れを担当したが、**第2期は、「コメント入れの観点」を作成、これに基づき、複数の新規担当者（地域コーディネーター）が分担してコメント入れを行った。**本講および研修についての理解を深め、新たに研修を担うことのできる人材の育成に寄与したと言える。また、複数の対話グループができた東京会場やオンライン会場では、**過去に本研修を修了した者が、研修での学びを活かし、難民当事者と受講者3、4名からなる対話グループでファシリテーションを担った。**これも難民等に対する日本語教育の継続的な人材育成の一つだと捉えられる。

課題

【オンライン会場での対話】

他の対面会場同様、難民当事者1名、受講者2～3名、ファシリテーター1名の小規模グループで実施したが、オンラインであるが故、ゲストスピーカーの話を通常の講義と同様の姿勢で受身的に聞く受講者の姿も一部に見られた。➡オンライン環境という限界はあるものの、積極的傾聴の姿勢が求められることを受講者に気づかせる働きかけ、ファシリテーターによる場の雰囲気づくりが対面会場よりもより重要。

【コメント入れ】

定められた基準にもとづきコメントを入れることに加え、担当者の経験や個性を生かして自由にコメントを入れることも推奨した。しかし、自由にコメントを入れるにあたり、新規担当者には書き手の思考を方向付けてしまわないか、自分のコメントは書き手にどの程度の重みをもって受け取られるのか等の懸念が生じていた。➡コメントを入れる担当者の立場や役割を明確化し、コメントを受ける受講者にも予め説明することが必要。

5. 成果と課題

【実習：難民等への日本語教育実践】

目的

- ①与えられた条件・環境（場所、時間、対象、クラス形態等）の下、難民的背景をもつ日本語学習者の置かれている状況やニーズ及び困りごとを踏まえて授業を組み立て、状況に応じ修正・調整を行いながら授業を実施する。
- ②自己の実践を、難民等に対する日本語教育に求められる視点を記述した「4つの到達目標」の枠組みで捉え直し、「次なる実践」に活かしていく。（「次なる実践」は、難民等の日本語教育に限らず、難民等以外に対する日本語教育をも含む。）

成果

受講者が記す実習記録と面談記録、実習アドバイザーが記す面談記録、実習アドバイザーへのヒアリングから総合して、目的は概ね達成されたと考える。

- **目的①について：**実習開始直後の受講者は、難民の情報保護の重要性や「ニーズや困りごとを踏まえること」に意識がいくためか、プライベートなことを聞いてもいいのか悩んだり、難見等が困っていることを聞き出そうとする様子が見られた。しかし、**実習を重ね関係性が構築されるにつれて、学習者の話から彼らの生活やニーズを汲み取り、授業に反映していく様子が見られた。**
- **目的②について：**実習記録の作成及び実習アドバイザーとの面談において、受講者は自己の実践を振り返り、「4つの到達目標」にどのように該当するのかを考えた。この作業は決して簡単なものではなく、**実習アドバイザーが「なぜそう思うのか」等の問いかけを重ね言語化を促していく「伴走」に大いに支えられていた。**また、副次的ではあるが、**実習アドバイザー自身も、「4つの到達目標を眺め、自分の実践とどのように結びつくのか考える日々」となり、面談を担当することにより難民等に対する日本語教育人材の育成がなされた**と言える。

5. 成果と課題

【実習：難民等への日本語教育実践】

課題

「4つの到達目標」が意識されるようになった結果、受講者は難民等の中長期的な人生の文脈を捉え日本語教育実践を行う必要性をより認識するようになった。これは成果と言えるのだが、同時に受講者は、この大きなテーマを4日間の実習でどのように実現すればよいのか悩むことにもなった。実習アドバイザーとの面談においては、4日間のみの実践では何もできないことや実践の方向性が定まらないまま教え手が次々入れ替わることについて「学習者に申し訳なく思う」という声も複数聞かれた。

➡同じ学習者を交代で担当する受講者たちが、教授内容の引継ぎに終わることなく、一つのグループとして実践の方向性を話し合う機会をつくることによって解決を図る必要がある。また、この機会が、オンライン研修の特徴とも言える「『挙手して質問するほどではないちょっとしたこと』を気軽に尋ねたり話したりできる相手や場がない孤独感」の解消にもなると考える。

5. 成果と課題

【研修修了者のその後】～難民等への日本語教育への関わりについて

難民等の急増と散在化が進む状況下、日本語教育の必要性が各地でこれまで以上に高まっており、彼らの定住を支えるために、対人援助の視点をもった日本語教育人材が必要とされている。本事業では、**研修修了者47名のうち、30名が難民等への日本語教育に関わっており**、その人材育成に寄与した。

研修修了者へのアンケートから

難民に対する日本語教育で実践を始めた/始めたい



研修修了とともに、難民事業本部（RHQ）が行う定住支援プログラムのオンラインコースで日本語授業を担当しています。

今後、難民等への日本語教育、日本語支援に関わっていきたいです。できれば学校教育等につながる支援、子どもに関わる支援をしたいと考えています。



難民等への日本語教育で学んだことを、他領域（難民等以外）の日本語教育へ展開



これまで難民等への「支援」という形での関わりは少しありましたが、「日本語教育」という関わりは、本研修で初めて経験しました。（中略）今後、機会があれば、これまでの仕事と私の経験が活かせる児童生徒や母親、女性を対象とした難民の方に日本語を教えたいと考えています。

参考資料

- ＊アンケートは全修了者を対象に2024年2月～3月にGoogleフォームを用いて実施。回答率等の詳細はp.22を参照。
- ＊アンケートの自由記述に関しては個人が特定されないように、意図が変わらない範囲で微修正を行った箇所がある。

参考資料：難民等に対する日本語教師（初任）の資質・能力

文化庁（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』で示された知識・技能・態度に関する記述（再掲）

『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』p.29より

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf（アクセス：2024年3月15日）

難民等に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力 表 6

	知識	技能	態度
難民等に対する日本語教師【初任】	【1 難民等に対する教育実践の前提となる知識】 (1) 世界の難民等の状況や国内の難民等を取り巻く状況について基礎的な知識を持っている。 (2) 日本の難民等受入れ施策に関する基礎的な知識を持っている。 (3) 難民等に対する日本語教育の経緯や変遷に関する知識を持っている。 (4) 難民等が持つことが多い学習上の様々な困難について理解し、日本語教師としてコミュニケーションを取るための基礎的な知識を持っている。 (5) 難民等が日本で生活及び学習において直面する課題や、問題が生じた場合の相談先や支援団体等について知識を持っている。 【2 日本語教育に関する知識】 (6) 難民等に対する教育実践を行う上で、配慮すべき事柄に対する専門知識を持っている。 (7) 難民等に対する日本語教育プログラムを効果的に実践するために必要となる教育方法に関する知識を持っている。 (8) 難民等の日本語能力や習得状況に応じた評価を適切に行う上で必要となる知識を持っている。	【1 難民等に対する教育実践のための技能】 (1) 日本語教育プログラムを踏まえ、子供から高齢者まで学習者の状況に応じ、適切な指導計画を立てることができる。 (2) 学習者の状況やライフステージに応じた指導方法を選択し、効果的な教育実践ができる。 (3) 学習者の経験や背景、精神状態や心理に配慮した教室活動、クラス運営を行うことができる。 (4) 学習者の自律的な日本語学習を支援するために、ICT等の多様なリソースを把握し、それらを活用した効果的な教育実践ができる。 (5) 学習者及び支援関係者に分かりやすく、学習動機にも配慮した評価を行うことができる。 【2 成長する日本語教師になるための技能】 (6) 指導計画に基づき実践した授業や教育活動を分析的に振り返り、改善と新たな実践のための検討ができる。 (7) 日本語学習の成果や課題を学習者やその家族等の関係者と共有し、より具体的な改善に繋げるための評価を実践することができる。 【3 社会とつながる力を育てる技能】 (8) 社会と学習者をつなぎ、学習者の日本語使用や日本文化の理解、社会参加を促進するための教室活動をデザインすることができる。 (9) 高齢者には日本語学習を通じた日本社会との接点を求める方も多いため、生涯学習としての日本語教育という観点から活動をデザインすることができる。	【1 言語教育者としての態度】 (1) 日本語教育の専門家として、学習者自身の課題や目的・目標を理解し、教育実践により良く反映させようとする。 (2) 日本語教育を通して、学習者のQOLの向上及びキャリアパスにつなげようとする。 (3) 家族や周囲の支援関係者と円滑に協働し、効果的に日本語教育を行おうとする。 【2 学習者に対する態度】 (4) 学習者自身及び周囲の支援関係者を励まし、力付け、日本語学習を継続していけるよう支援しようとする。 (5) 学習者の言語やこれまでの経験に敬意を払い、個々の事情に配慮しながら、異なる社会の中で一つずつ目標を達成していけるよう支援しようとする。 【3 文化多様性・社会性に対する態度】 (6) 学習者が人とつながり、ネットワークを構築する力を育てようとする。 (7) 地域社会や多様な機関と連携・協力し、難民等が自立的に生活するための、エンパワーメントとしての日本語教育を実践しようとする。

参考資料：講義内容一覧

講師	回	講義タイトル	講義内容
人見 泰弘 武蔵大学社会学部 准教授	講義A ゼロ	「難民等」概論	● 難民とは ● 難民のニーズと受け入れ状況 ● 難民の保護にかかる国際的枠組み ● 日本の難民受け入れの外観 ● 難民にとっての日本語学習の場とは
葛西 伶 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR） 駐日事務所シニア法務アシスタント	講義A1	世界における難民受け入れ	● 難民の定義と多様性 ● UNHCRの役割 ● 諸外国における難民受け入れの動向 ● Whole-of-Society Approachについて ● 国際的な動きからみた難民をとりまく課題
鈴木 功 （公財）アジア福祉教育財団 難民事業部	講義A2	日本の難民等受け入れの経緯と基本的な受け入れ方針・体制	● 日本での難民受け入れと国の支援事業 ● 条約難民および第三国定住難民への国の定住支援プログラム ● 難民認定申請者への国の取り組み ● ウクライナ避難民への国の取り組み
檜山 怜美 特定非営利活動法人なんみんフォーラム事務局	講義A3	日本における難民等の現状	● なんみんフォーラム（FRJ）について ● 日本の難民受け入れスキーム ● 日本に暮らす難民の居住地、国籍等の分布 ● 日本の難民受け入れ施策の課題 ● 各アクターの取り組みと連携状況
鶴木 由美子 認定NPO法人 難民支援協会（JAR）	講義B1	日本における難民等の多様性①	● 難民支援協会（JAR）について ● 日本における難民の状況（特に難民申請者の状況） ● 日本における難民の保護にかかる課題 ● 日本で難民が直面する多様な困難

参考資料：講義内容一覧

講師	回	講義タイトル	講義内容
田中 美穂子 早稲田大学日本語教育研究センター インストラクター（非常勤）	講義B2	日本における難民等の多様性②	難民的背景をもつゲストスピーカーの語りを聴く（ゲストスピーカーへのインタビューセッション）
伴野 崇生 社会構想大学院大学実務教育研究科 准教授	講義B3	難民等の異文化受容・適応（ケースメソッド）	ケース教材を使い、主人公の視点からその人が持っている世界、その人から見えている世界を捉える。難民等に対する日本語教育における異文化受容・適応について考え、これまで持ってきた異文化受容・適応に関する自分自身のあり方を捉え直す（個人ワークとグループワーク）
野山 広 国立国語研究所 日本語教育研究領域	講義B4	難民への理解を深める 一言語学習者としての側面から一	- 定住する外国人学習者についての縦断調査について - 縦断調査の成果から見てきたこと（第二言語の言語摩滅の問題について） - 分析結果から見てきたこと（高齢化する定住外国人のケアについて） - 今後の展望（研究、対応施策・方策の展開について） - グループに分かれての話し合い（第一期：自分の言語の歴史について語る、第二期：言語摩滅を防ぐために支援者ができることはなにか） - 取り組み事例についてのビデオ視聴
鵜川 晃 大正大学社会共生学部公共政策学科 教授	講義B5	難民への理解を深める 一臨床心理学の視点からの理解一	- 難民化のプロセスとヘルスケアの課題 - 受け入れ国での心理的適応のプロセス - 難民らが抱えやすい心の病の留意点 - うつ病とは - 日本語教師としての関わり方

参考資料：講義内容一覧

講師	回	講義タイトル	講義内容
鵜川 晃 大正大学社会共生学部公共政策学科 教授	講義B5	難民への理解を深めるー 臨床心理学の視点からの理 解ー	● 難民化のプロセスとヘルスケアの課題 ● 受け入れ国での心理的適応のプロセス ● 難民らが抱えやすい心の病の留意点 ● うつ病とは ● 日本語教師としての関わり方
矢崎 理恵 (社福) さばうと21 学習支援室チー フコーディネーター	講義C ゼロ	「難民等に対する日本語教 育」概論	● 難民的背景をもって来日した後の日本語教育 ● 日本難民等への定住支援と日本語教育 ● 現在の課題 (取り残されるかもしれない人々)
小瀧 雅子 (公社) 国際日本語普及協会 (AJALT)	講義C1	難民等に対する日本語教育 (公的な支援を中心に) 2 ⑥ 難民等に対する日本 語教育	● 難民のための定住支援プログラム ● 難民への日本語教育はそれまでの日本語教育との違い ● 現在の難民への公的な日本語教育の体制 ● 定住支援プログラムの学習 ● 条約難民クラス ● 第三国定住難民クラス ● RHQ支援センターの学習理念と目標等 ● 最近の難民・避難民受け入れの動きと今後の課題
矢崎 理恵 (社福) さばうと21 学習支援室チー フコーディネーター	講義C2	難民等に対する日本語教育 (公的な支援以外を中心 に)	● 難民的背景をもつLさんのお話をきく (日本語習得につい て) ● 公的支援「以外」の場で行われる日本語教育-さばうと 21の実践から- ● 公的支援「以外」で行われている日本語教育-様々なかた ち-
小川 珠子 首都圏中国帰国者支援・交流センター	講義C3	中国帰国者に対する日本語 教育	● 学習者としての「帰国者」 ● 「帰国者」に対する日本語教育 ● .来日 (帰国) 初期の集中研修 ● .生涯学習に"伴走"する長期的な支援体制 ● .ライフステージごとの課題

参考資料：講義内容一覧

講師	回	講義タイトル	講義内容
石川 美絵子 (社福) 日本国際社会事業団 常務理事	講義D1	難民等の社会参加	● 日本国際社会事業団 (ISSJ) について ● ISSJの難民支援 ● 日本語教室—コミュニティ支援の一環として ● 移動と変化—難民の心理社会的理解 ● 難民支援の視点 ● 難民支援とソーシャルワーク ● 支援とは
伴野 崇生 社会構想大学院大学実務教育研究科 准 教授	講義D2	難民等のライフステージに 合わせたキャリアプランと 日本語教育	● キャリア発達の諸段階と発達課題 ● 事例：4人の「難民」のつづやきを通じて考える ● 事例：2人の「難民」当事者の声の紹介（ニーズ、居場所と役割） ● 動機付け理論、キャリア構築理論 ● 異文化間トレランスとネガティブケイパビリティ ● 難民高等教育プログラムと難民専門学校教育プログラムの紹介 ● パターン・ランゲージによる〈わざ〉の記述

参考資料：受講者アンケート結果

【質問1-1】 世界の難民等の状況や国内の難民等の状況について基礎的な理解ができましたか？

	理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できていない	ほとんど理解できていない	研修以前から理解していた
第1期	11	15	1	0	0
第2期	10	7	0	0	0

【質問1-2】 日本の難民等受入れ施策について基礎的な理解ができましたか？

	理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できていない	ほとんど理解できていない	研修以前から理解していた
第1期	12	13	2	0	0
第2期	11	4	2	0	0

【質問1-3】 難民等に対する日本語教育の経緯や変遷、難民等に対する日本語教育の現状と多様性について、基礎的な理解ができましたか？

	理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できていない	ほとんど理解できていない	研修以前から理解していた
第1期	10	15	2	0	0
第2期	8	7	2	0	0

参考資料：受講者アンケート結果

【質問2】 無意識の思い込みや決めつけをしているかもしれない、ということを実感し、難民等の状況や置かれている環境を鑑みて彼らの思いや抱えている（かもしれない）困難に対し、想像力を働かせることができるようになりましたか？

	できるようになった	まあまあできるようになった	あまりできるようになっていない	ほとんどできるようになっていない	研修以前からできていた
第1期	11	14	2	0	0
第2期	8	9	0	0	0

【質問3】 難民等に対する日本語教育の場面で特に必要な配慮について理解ができましたか？

	理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できていない	ほとんど理解できていない	研修以前から理解していた
第1期	14	12	1	0	0
第2期	11	6	0	0	0

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-1】 難民等への日本語教育の場面において、難民等の多様性を構成する観点や要素を考え、個々の学習者とやりとりができるようになりましたか？本研修中の実習を含んでいただいて結構です。

	できるようになった	まあまあできるようになった	あまりできるようになっていない	ほとんどできるようになってない	研修以前からできていた
第1期	7	14	5	1	0
第2期	5	7	5	0	0

【質問4-2】 質問4-1で「できるようになった」又は「まあまあできるようになった」と答えた方は、差支えのない範囲で、当該学習者の状況とそれに対するご自身の対応を教えてください。「あまりできるようになっていない」や「まったくできるようになっていない」と答えた方は理由を教えてください。

質問4-1回答	質問4-2回答
まあまあできるようになった	日常生活のさまざまな愚痴を聴いてもらいたいという気持ちも強くありながら、その中に、知的好奇心や学習意欲も感じられる学習者でしたので、その方の気持ちやペースに寄り添いながら、傾聴に努め、生活に役立つ情報や日本語を提供しました。
あまりできるようになっていない	実習の中でオンライン、家族の学習を担当した。学習者の学びたいことを傾聴しようとしたあまりに漢字と文法の学習量のバランスが崩れ、予定の進度通りいかないことがあった。また質問が沢山出たので答えると学習内容より脱線することもあり、留学生なら、授業後対応できるが、限られた時間の中で学習者の質問にどこまで対応するのか、進度表を完了するべきなのかチームティーチングと理解しているが、難しさや戸惑いがあった。結果、学習者の学びたいことを優先、質問には全て対応した。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
できるようになった	入管へ行くので休むとか突然授業に出られない事情ができて辞めてしまうケースがありました。なぜ休んだり辞めたりしてしまうのか自分を責めてしまうことがありましたが、さまざまな事情で生じる可能性があることがわかりました。原因を追及しすぎないように、心理的に追い詰められなくなりました。
まあまあできるようになった	研修後に関わった仕事である国に対して非常に憤りを感じている学習者が話し出したのですが、否定せずに傾聴ができた。
あまりできるようになっていない	難民等と実際に接する機会が全然無いから。
まあまあできるようになった	母語の読み書きができない子どもたちのために、どうしたら読み、書きが好きになるかということについて考えています。
できるようになった	例えば10代の学習者が日本の中学、高校で勉強したくても言葉の壁があったり、またその壁以前に集中して勉強できない心理的、環境的問題がある場合もある。それらのことを理解し、時にはゆっくり本人の様子を見ながら、寄り添うようなアプローチができていると思う。
あまりできるようになっていない	そういった場面に遭遇していないから。
まあまあできるようになった	中学三年である彼の進路について、結論を急がせることなく、彼と母親が選択できるまで待てるようになった。
まあまあできるようになった	私個人は難民の方との学習はほぼありませんが、日本語教室でウクライナ避難民の方を仲間が担当し、初回のインタビューで家族のことを聞いてしまい、ご本人が涙ぐまれたということがありました。背景を想像し、配慮する対応を考えさせられる出来事でした。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
できるようになった	授業で、日本語参照枠A 2にのっとり、自分の所有物、場所、出来事について簡単に言えるという発表の時間。ウクライナの大学三年生が、ウクライナについて話したい、と原稿を書き始めた。最初は勢いよく、ウクライナの美しさ、すばらしさを書き、そのすべてを破壊したロシアを攻撃する文章だったが、だんだん、筆が止まり、最後に「先生、悲しくてもう書けません」と言った。おそらく、発表できないだろうと思いつつ、止めることもできず、原稿を書かせることにより、時間を与え、発表の途中で泣き出してしまいう事態を避けたいと思ったのだが、それが成功したと思う。研修で、「失ったものを思い出す辛さ」を学習したことが、私の行動指針になった。
まあまあできるようになった	家族が一緒にいるので、授業に集中できないことがある、日本にいない家族が安全かどうかわからない、などを理解するようになりました。
まあまあできるようになった	仕事を探しているが、すべての求人に応募できるわけではない。個人で相談に乗るのは避けたほうが良い。
まあまあできるようになった	本国の情勢の悪化、ご両親との別離、幼い妹を連れての避難など、学習を進めるうちにたくさん話してくれるようになったため、傾聴に努めた。
ほとんどできるようになってない	「難民等の多様性を構成する観点や要素を考え」という点では、実習で学習者とのやりとりがなかったと思うので。
できるようになった	定住支援プログラム終了後のアフガニスタン難民の方々を指導しています。ほんの数か月間、日本語学習の空白期間があっただけで、それ以前の学習成果がほぼ振り出しに戻ってしまう現状を目の当たりにし、改めて継続学習の大切さと途切れない学習支援の必要性を感じました。生活のための長時間労働で学習時間の確保もままならない状況下の彼らに、いかにモチベーションを維持させつつ日本語習得と就職等への成果につなげられるか、日々努力しています。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
まあまあできるようになった	大家さん側の都合で引っ越しすることになった。現在加入している保険を解約したいとのことで、契約書と保険に関する記載のある葉書を持参してきた。保険会社に連絡をとるよう、葉書に記載された電話番号を案内した。
あまりできるようになっていない	第三国定住難民の方に関わっているが、日本に来る前の仕事と日本での仕事とのギャップを感じたり、家族と違う国へ来たことへの疑問を持っていたり、精神的な不安定さ、睡眠に関すること、お金を浪費することへの罪悪感などがあることは理解できるようになったが、基本的に話を聞くだけにとどまっている。
まあまあできるようになった	学習者のお子様が小学校から持ち帰る配布物の内容理解、および提出する際の記載方法を学習した。
まあまあできるようになった	マンツーマンのレッスン中、体調を崩しメンタルが不安定になった方が、日本への不満愚痴怒りが授業中止まらなくなったので、傾聴に徹し、必要があれば日本語指導以外の支援にもつながれるように、支援者さんやコーディネーター、周りの人たちが、この方の状況を把握しておけるように、コーディネーターにも状況を報告した。
まあまあできるようになった	・学習者は不安定な状況の中で高校卒業を目指し、自身の日本語力をはるかに超えた高校の勉強に取り組んでいた。学習者の思いを尊重し高校の教科の勉強（生物、現代社会、国語など）を助けつつ、日本語の基礎力の向上をはかった。 ・同じクラスに母国で高等教育を受け理解力の高い学習者と非識字で学習が極端に進まない学習者がいる。それぞれの状況と必要な日本語に考慮し、可能な範囲で個別対応している。
できるようになった	学習者から高校進学について相談されたので、話を聞いた後、支援機関にも相談するように促した。
できるようになった	進学の相談に乗り、母国での教育の状況を把握したり、本人の意思を尊重したキャリア設計を考えた。
まあまあできるようになった	衣類を買いたいと要望があり、市内でおすすめのショッピングスポットを紹介した。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
まあまあできるようになった	日本での暮らしの中では買い物以外の外出はほとんどないようだった。学習者は学ぶ意欲はあるが実践、実際に日本語を使う場面が少ないようだった。授業の場面で教師と学習者の立場を変え本国の料理を教えてもらった。適切な言葉がなかなか出て来ず、最後は動画を見ながら説明をしてくれた。生きた日本語、これだとその場で言葉を取得することができた。
できるようになった	ムスリム女性の学習（特に自習）が進まない背景に、これまでの学習経験の乏しさに思いを巡らせて、意欲の無さを表すものではない、と想像して対応できるようになった。
まあまあできるようになった	日本語学習歴がなく、日本語が全く分からない人が私どもの学習会で日本語を学び始めた。日本語学習の第一回目から「私の名前は～です。～に住んでいます。」と自分の名前と住所（入居中の難民シェルター）をはっきりと言えるように練習した。また、文字で書く練習もした。道に迷った場合、不測の事故に遭った場合、あらぬ疑いをかけられた場合などに何よりも優先して必要だと思われるため。日本人に分かるような発音で話せるように練習した。
あまりできるようになっていない	実習で担当した学習者から、あまり困りごとの話題を引き出すことができなかったのので、解決が必要な問題の対応を行うことができなかったの。
あまりできるようになっていない	四回の実習だけでは、経験として足りず、できるようになったかどうかは分からないため。
できるようになった	東京の子育て支援の申請の仕方がわからないとのことだったので、一緒に申請手続きをした。その後、手続き不備があったので、再度修正を一緒に行った。
まあまあできるようになった	「RHQや支援者に会いに行くので、授業を休む」と連絡が来た際に、状況を把握のうえ、理解ができるようになった。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
できるようになった	日本人に対して手紙を書きたいと言って来た学習者に一緒に手紙の文面について考えてあげて感謝された
まあまあできるようになった	「キャリアの断絶、社会あるいは家庭内での地位の下降的移動」に配慮しながら、レッスン中に学習者の母国での教育や仕事の状況を聞き、差し障りのない範囲で今の状況と今後どうしていきたいか話してもらい、気持ちに寄り添いながら、できるだけ前向きに日本語学習に取り組んでもらえるようにした。
できるようになった	お子さんが高校受験なので落ち着かず、授業に集中できなかったが、それに合わせて準備したものの大半を省き話を聞いた。さらに、学習者の要望に従い授業を30分早く終わらせた。
まあまあできるようになった	新しい就職先の「履歴書」の「志望動機」の欄で、本来彼女の能力を使える仕事（医師）ではないけれども、自分が出来る仕事を「志望」する理由を聞きながら書くサポートしました。①RISEプログラムがあるから②家族のために仕事が必要だから③日本語が上達すると思うからという、3つの理由を彼女からお聞きしました。職種や仕事の内容に興味があって志望するのではない3つの理由は、彼女の本音に近い気持ちを書くことができるサポートが出来たと思いました。
まあまあできるようになった	短い実習ではありましたが、実習までに「この人はこうだ、という決めつけをしてはいけない。個人を見ることが必要。」だと教えて頂いていたので、学習者さんへの偏見をもたずに接し、またその際は様々な経験をされていることを念頭におくようにしました。
できるようになった	難民当事者の日本語学習に対する消極的な姿勢について、ご本人のこれまでの学習歴や成育歴も踏まえ、またメンタル面で不安定であることなども考慮に入れ、日本語の指導者としておおらかに受け入れられるようになった。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問4-2（つづき）】

質問4-1回答	質問4-2回答
できるようになった	連携
あまりできるようになっていない	今回の実習で具体的な事例に遭遇していないため、「あまり、、」を選択した。
あまりできるようになっていない	4回の実習でしか、学習者と関わっていないので、回答例のような事態が発生しなかった。
あまりできるようになっていない	研修中から研修後にかけて、日本で安定した生活を送っている方としかお会いしていないので、できるようになったとは言えないのではないかと考えたから。
まあまあできるようになった	他国へ避難していた時の話をしていたので、傾聴した。現在の生活状況で足りないことや不安を聞いた。ムスリムに必要なものを買える場所などの質問があったので、調べて答えた。
できるようになった	定住支援プログラム終了後のアフガニスタン難民の方々を指導しています。ほんの数か月間、日本語学習の空白期間があっただけで、それ以前の学習成果がほぼ振り出しに戻ってしまう現状を目の当たりにし、改めて継続学習の大切さと途切れない学習支援の必要性を感じました。生活のための長時間労働で学習時間の確保もままならない状況下の彼らに、いかにモチベーションを維持させつつ日本語習得と就職等への成果につなげられるか、日々努力しています。
まあまあできるようになった	すでに日本国籍を取得した方が学習者で、本人がRHQの支援センターで、難民に対して国籍取得のセミナーを実施後の授業だったこともあり、国籍を取得するまでに大変だったことを伺うことができた。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問5-1】 日本語教師として、難民等のQOL（Quality of Life）の向上に少しでも貢献できそうだと感じましたか？

	感じた	まあまあ感じた	あまり感じなかった	ほとんど感じなかった	研修以前から感じていた
第1期	12	12	3	0	0
第2期	11	5	1	0	0

【質問5-2】 質問5-1でその回答を選んだ理由を教えてください。

質問5-1回答	質問5-2回答
まあまあ感じた	実習中のことですが、学習者の方から毎回肯定的な評価（先生は私の話をよく聴いてくれる、役に立つ、等）を言ってもらえていたので、まあまあできたのではないかと感じました。
感じた	研修前は、全く関わっていなかったので、研修を通じて難民に関連する日本語教師に出会うことができました。また実習相手と日常生活の中で偶然であったことがあり、普段の生活の中で実は難民等の方々が身近にいるんだと知ることができた。そのような意味で普段の生活の中で意識するようになったから
感じた	以前はどうするかもわからなかったのですが、難民の方々の将来を想像して声かけするようになりました。
まあまあ感じた	難民の方が日本語を使って日本で生活していくことのお手伝いができそうな気がしたからです。
あまり感じなかった	難民等と実際に接する機会が全然無いから。
まあまあ感じた	まだ専門性が足りないと感じることが多いため。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問5-2（つづき）】 質問5-1でその回答を選んだ理由を教えてください。

質問5-1回答	質問5-2回答
感じた	できるだけ力になろうと考えているから。
感じた	今年の冬、暖かい服を難民に贈る活動をした。購入して1回しか着ていないダウンコートなど、ずっと死蔵していたものを、お渡しするという活動を初めて行った。彼らが喜んでくれるのが、私の喜びとなった。
あまり感じなかった	貢献できそうだと感じたが、具体的にどのように、地域で、あるいは自分のできる範囲内でできるのか、具体的な考えが浮かばなかった。一般論として捉えることは十分できたと思う。
まあまあ感じた	彼らの進路決定に関して、選択肢を示しつつ、支援者として、少しは貢献できたと感じた。
まあまあ感じた	同じ人として、自分の人生を生きることは当然の権利であり、日本社会の一員として共生することが難民の方、そして我々の社会の成熟に繋がる。自己実現の先には、精神的にも経済的にも豊かな将来が拓けていく可能性があると考えている。
まあまあ感じた	「かもしれない」が頭のどこかにあり、授業の際の対応が変わった気がします。
まあまあ感じた	以前より、難民の生活について詳しくなったので、どういう支援が必要かなど少し理解ができた。
感じた	支援してもらっただけでなく、自分が本国出身の難民を支援したいという思いを持っていることがわかり、他者を支援するための学習に力を入れている。
感じた	以前よりもQOLを意識した授業を考えていくと思うからです。
感じた	難民等の方が日本社会で生活し、自己実現を図るうえで日本語習得は最優先の課題です。日本語指導をとおして、彼らが日本社会に一步踏み出せる支援ができると考えています。
あまり感じなかった	難民等の方々の社会参加は、社会的にも、言語面においてもハードルが高い。自分にはまだ、支援する力が不足していると思う。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問5-2（つづき）】 質問5-1でその回答を選んだ理由を教えてください。

質問5-1回答	質問5-2回答
まあまあ感じた	難民等が自己実現・自己決定できることをもっと大切にしようという意識を持てた。押し付けることを避けようという意識が強くなった。 最終的には自分の意志を尊重したいが、地域のいろいろな日本人と出会う機会など、仕事以外で地域に参加できる機会・きっかけをたくさん作っていきたいと思った。
まあまあ感じた	日本社会で生き抜く為には、難民を背景に持つ方々には、日本語の習得が必須であり、そのサポートが出来る可能性がある事を実践出来た為。
感じた	難民の背景を持つ方々に研修前から日本語を教えていたのですが、やはり日本での生活をがんばりたいと期待して学びに来る方が多いと感じていました。でも、研修前は、自分の知識の無さから、どのようにそこに貢献できるのか分からず、自信がなかったのですが、今は、いろいろな工夫ができるようになったから。
感じた	日本語を学ぼうとする学習者の気持ちに共感し、状況を理解し、自分にできる範囲で必要な支援をすれば、QOLの向上に貢献できると思う。ただし、どのくらい貢献できるか、どのくらい迅速に適切に貢献できるかは、教師の経験・力量・人間性などによると思う。
感じた	実習や難民的背景を持った方との対話を通して、難民等のQOL（Quality of Life）の向上について具体的なイメージを持つことができたからです。
感じた	日本語を教えるだけでなく、もっと多様な視点で難民自身のQOLの向上を考え、難民支援をしたいと考えた。
まあまあ感じた	日本の文化や習慣などを教師から伝えることにより実生活に役立ち理解も深まって行く。
まあまあ感じた	難民等の日本語学習を支援するだけでなく、彼らの自己肯定感が高まる活動を織り込みながら支援をしたいという心持になった。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問5-2（つづき）】 質問5-1でその回答を選んだ理由を教えてください。

質問5-1回答	質問5-2回答
感じた	自主夜間中学を主宰し、不登校の子どもたちやひきこもりの人、および、外国人を対象に学習の場を開いている。外国人だけでなく地域の子どもや高齢者など多様な人たちが集まるため、難民等の人たちも地域の一員として交流できる場となっている。時々、難民等の人たちが故郷のことばやダンスを教えてくれたりもする。こうした交流を通じて、自己表現、社会参加、支援者との相互の尊重が実現できていると感じる。
まあまあ感じた	自分事を話してもらえたので、学習者が日本語を使って自己を解放する窓口には、なれるのではないかと感じたので。
感じた	社会参加活動に必要な職場での会話実践をおこなったり、地元の生活情報を共有したりしたから。また、目標としている資格試験に向けての学習にも少しだけ取り組めたから。
まあまあ感じた	どのようなニーズや希望があるかが分かったため。
感じた	日本語を勉強し始めた学習者が、近所の人と日本語でコミュニケーションを取ろうと自己紹介の仕方を学び、実際に近所の人と知り合いになれた。
感じた	理論的な事を同時に実際に難民等の方たちと授業を通じて交流できたので、より理解が深まった気がしました
感じた	難民等の背景や置かれている状況を想像できる伴走者となれるから。
まあまあ感じた	「日本語教師」としての手応えは少し感じられたから。
感じた	漢字教材で「無理」という言葉が「不可能」という意味だけで出ていたが、仕事場や子育てで役に立つら「無理しないで」をパワポで導入、「無視」も教科書の訳が役に立たないので、「友達が私を無視する」「信号無視」を導入。前者は学習者の奥さんと女子によくあると話がもりあがり、後者はご主人が仕事帰り駅前の信号をいつも無視していると話してくれた。これによりお二人の雑談による自己発信力が促進できたと感じた。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問5-2（つづき）】 質問5-1でその回答を選んだ理由を教えてください。

質問5-1回答	質問5-2回答
感じた	「難民等」の方の様々な背景を理解できるようになり、必要なサポートや繋げる先が少しは理解できるようになったので、今後、「難民等」の背景を持った方が学習者となっても、受入れに対して以前よりは、準備できていると感じています。
感じた	「QOL」について、初めは難しく考えていたが、お話を聞くうちに、身近な「できること」や「ニーズ」に関連して、小さな一歩をたいせつに積み重ねるところから関わっていくことを学んだ。
感じた	日本で生活をしていく上で、日本語ができるとそれだけ世界が広がると考えるため。
あまり感じなかった	4回の実習の経験しかないため、貢献できると言い切れない。
感じた	現時点の私の日本語教師経験ではまだ厳しい状況ですが、経験を重ねた後、日本で暮らす難民等の方が日本で少しでも快適に過ごせるようにするお手伝いをする上で、日本語教師の存在は無くしてはならないと思ったためです。日本で生活するためには日本語が必ず必要になると思うためです。
まあまあ感じた	難民的背景を持つ方の生活に必要な情報を必要な時に情報提供しようと思えるようになった。
感じた	難民であるがゆえに生活面で抱えている課題は大きいものの、一緒に絶望はせず、ともに歩みをそろえながらどのように将来に希望を抱いていけるのか考える存在になるべきであると自分を鼓舞することができそうに思えた。
まあまあ感じた	家族でも、職場の人間でもなく、利害関係のない立場の人間に対して話せることもあり、その点で、傾聴をして、彼らをエンパワメントできるのではないかと感じた。
感じた	自己表現についてその方法には様々なものがあると感じた

参考資料：受講者アンケート結果

【質問6】 難民等にかかわる機関や団体などについて、その活動の内容を含めて理解が深まりましたか？

	深まった	まあまあ深まった	あまり深まらなかった	ほとんど深まらなかった	研修以前から理解していた
第1期	13	12	2	0	0
第2期	10	7	0	0	0

【質問7-1】 難民等への日本語教育において、日本語教師としてできること・できないことや、一人で解決しようとした場合のリスクについて、十分に意識できるようになりましたか？

	できるようになった	まあまあできるようになった	あまりできるようになっていない	ほとんどできるようになってない	研修以前からできていた
第1期	16	10	1	0	0
第2期	11	5	1	0	0

参考資料：受講者アンケート結果

【質問7-2】 難民等への日本語教育の場面において、自身だけでは対応できない状況が生じた際やより良い支援提供を行う必要を感じた際に、自身の所属先や、適当と思われる機関などにタイムリーに相談することができるようになりましたか？

	できるようになった	まあまあできるようになった	あまりできるようになっていない	ほとんどできるようになってない	研修以前からできていた
第1期	11	11	4	1	0
第2期	5	7	4	1	0

【質問8】 難民等への日本語教育を実施している多様な現場について、その教育内容を含めて理解が深まりましたか？

	深まった	まあまあ深まった	あまり深まらなかった	ほとんど深まらなかった	研修以前から理解していた
第1期	9	14	4	0	0
第2期	9	7	1	0	0

参考資料：受講者アンケート結果

【質問9】 今回の研修・実習は、難民等への日本語教育を行う際に、与えられた条件・環境を鑑みて、必要とされる授業やコースの組み立てを検討する上で役立つと感じましたか？

	感じた	まあまあ感じた	あまり感じなかった	ほとんど感じなかった
第1期	16	9	2	0
第2期	9	7	1	0

【質問10-1】 さぼうと21について、研修参加前からご存じでしたか？

	第1期	第2期
研修に参加するよりも以前から知っていた	15	7
研修に参加する前から知っていたが、日本語教育支援への関わりは知らなかった。	0	1
知らなかった	12	9

【質問10-2】 研修に参加する前からさぼうと21をご存じの方は、いつごろ、どのようなきっかけで知ったか教えてください。

5年ほど前、勤務していた大学の日本語教育実習の中の見学先として、さぼうと21に出会いました。
2022年頃、多文化共生に関するメールで、求人情報からホームページを拝見して知った。
1年ぐらい前に、知人から口ヒンギャ難民の子どもたちへの学習支援について聞いた。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問10-2（つづき）】 研修に参加する前からさぽうと21をご存じの方は、いつごろ、どのようなきっかけで知ったか教えてください。

難民支援NPOの代表者からさぽうと21のコーディネーターからのメール転送をもらった
所属している日本語教室で、さぽうと21のコーディネーターによる講義を受講した。
20年以上前に、参加した分科会がさぽうと21の方の発表でした。
3年ほど前に友人の紹介でさぽうと21を知り、ボランティア活動に参加させていただいております。
2022年頃。さぽうと21で日本語教師として活動している友人から紹介された。
大学を卒業したときに、当時難民支援団体で働く親族の紹介での活動を知った。
いつかは覚えていないが、ホームページをみたことがあり、教材などもみたことがある。地域の日本語教室などについて検索していたときだったと思う。
2015年頃、ボランティア活動先を探していた際、WEBでの検索の結果。
さぽうと21に関わっている方と一緒に仕事をする機会がありました。
在籍していた大学と提携していた。
2020年秋、勤務先の社会貢献活動でさぽうと21で活動させていただくことになったこと。
16年ほど前に自宅の近くで日本語学習支援のボランティアを募集していたので応募したのがきっかけです。
この研修を申し込んだ後、児童生徒への学習支援の募集があり、それを応募したことによって知りました。
SNSの記事を見て。
10年ほど前に在日ミャンマー人のボランティアをしていた際、教材を利用させていただいたことがあります。その時のボランティア仲間がさぽうと21の研修に参加しているようなことも聞きました。また、「難民を助ける会」を先に知り、さぽうと21が国内事業を主としている姉妹団体であることを知っていました。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問10-2（つづき）】 研修に参加する前からさぼうと21をご存じの方は、いつごろ、どのようなきっかけで知ったか教えてください。

関連するメーリングリストへのさぼうと21の方からの投稿で、お名前を知っていました。いつ頃からかは、分かりません。
日本に住む外国人の子供へのサポートに関心を持っている友人から聞いたことがあったため。
いつごろかは忘れたが、日本語教育の観点から難民支援をしている団体だと名前だけ知っていた。実際に関わったのは、2022年12月に「ウクライナ避難民への日本語学習支援者 情報共有の会」に参加させていただいてからだと思います。
6年くらい前に、山梨で行われた社全協研究大会の多文化共生分科会に参加して
数年前、難民支援団体に勤務していたので、やりとりなどがあり、知っていた

【質問10-3】 研修を通じて、さぼうと21の活動への理解が深まりましたか？

	深まった	まあまあ深まった	あまり深まらなかった	ほとんど深まらなかった	研修以前から理解していた
第1期	19	6	2	0	0
第2期	13	4	0	0	0

参考資料：受講者アンケート結果

【質問11】 研修に参加する前と比べて、難民等への日本語教育に関わる様々な質問や相談を受けた際、問い合わせのできる機関や団体がより明確になりましたか？

	明確になった	まあまあ明確になった	あまり明確にならなかった	ほとんど明確にならなかった	研修以前からよく知っていた
第1期	19	6	2	0	0
第2期	13	4	0	0	0

【質問12】 研修を通じて、難民等への日本語教育を学ぶ意義や重要性について、周りの日本語教師に伝えたいと思うようになりましたか？

	思うようになった	思うようにならなかった	研修以前からそう思っていた
第1期	23	2	2
第2期	16	1	0

【質問13】 その他、研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたことがあれば教えてください。

さぽうと21のスタッフの方々の話し方、対応の仕方に感銘を受けることが多かったです。人に接するときに必要な誠実さ、寛容さ、ユーモアが感じられ、とても勉強になりました。

知らないことがまだまだあることに気がつき、自分の経験を活かせることは最大限活かしたいと思った。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問13（つづき）】 その他、研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたことがあれば教えてください。

特に「傾聴」の大切さが日本語教育に関わらず日々の生活の中で、家族間でも大切だと言うことが学びとなった。日本語教育では留学生を主に担当しているが、研修後学習者に対して「怒る」とは何か常に考えている。同じチームの教師が学習者に対しての「怒り」は主に自己基準の判断の中で行なっていることもわかり、自身の振り返りとして、学習者の指導の中での「怒り」は教師目線なのか学習者目線なのか常に考えてから指導できるようになった。そして、学習者にとって教師の怒りとは、「先生はお腹が空いているんだ」と言う捉え方もあることがわかり、学習者の背景によっても「怒り」の捉え方が異なることもわかった。このように傾聴することは、学習者を冷静に対応できる学習者を理解することだけでなく、傾聴する側にも役立つことだと気づいた。

研修前はこんなに時間を取られるものとは思いませんでした。講義を受けるのもレポートをまとめるのも集中して取り組まなければならないものでした。時間的にも体力的にもきつかったです。それでも講義内容には難民に対する考え方や接し方や背景やキャリアプラン等新しい知識が次々に提示され、興味深いと思いながら毎回参加していました。この研修で自分自身は細く長く関わることの意義を学びました。これからも微力ながら難民の方々の支援を続けようと思っています。

研修内の実習で、平仮名しか知らない、殆んどゼロ初級の外国人学習者に日本語を教えることになるとは、思ってもみなかった。自分が通った日本語教師養成講座の教育実習では、日本に住んで15年～20年以上の、日本語が堪能なモデルチューデントさん相手の実習だったので。参加できなかった回について、事後に動画を視聴することで出席に替えて頂けたのが良かった。

実習のスケジュールや必要な記録、指導内容などについて、コースの中で丁寧に説明してもらえたらと思いました。

一口に難民と言っても、そして同じ国の難民の方達であってもやはり一人一人違うということ。基本的に押さえておくべきポイントは同じでも、対応する場合にはゼロから白紙の状態に対応することが大切だと思う。

「その人のプライベートに相手が言わない限り踏み込まない」「相手が言いたい時はじっと傾聴する」「辛いことを話す相手ができたと喜んでもらっているときは、適度な距離を保ちつつ相手になる」

難民に関して、初めて知ることばかりでした。また、私自身、当然こうあるべきと考えていることが、彼らの視点では全く異なるということにも気づかされました。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問13（つづき）】 その他、研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたことがあれば教えてください。

難民等への日本語教育は、難民等ではないかもしれない人への日本語教育でも考えておいた方がいいと思いました。また、今まであまり気にしていなかったけれども、難民的背景を持っていた人や持つようになった人と自分が関わっていたことに気付きました。

外国につながる子供たちと難民のこどもたちでは似ているようで似ていないということが分かった。

特に、実際に難民の方からお話が伺えたことが大きな学びとなりました。難民に対するイメージが変わり、これまで自分がいかに難民をパターン化していたかに気づかされました。

様々なことを知り、考えた研修でしたが、最も印象に残っているのは講義や演習での難民当事者のお話だと思います。自分とは国籍や環境が違う人でも、感じること、大切なことは結局同じなんだと気づけました。

ある先生が担当された講義が大変勉強になりました。特に演習やグループワークなどをとおして、自分自身の考えを整理したり、ネガティブケイパビリティ等の理論を解説していただき、今後、自分自身の日本語指導において大事にする「視点」がより明確になりました。

難民的な背景を持つ方の語りを実際に聞くことができたのは大変良い機会でした。どのような経緯で日本に来たのか、また来日後の歩みを知ることで、その方の抱える問題が浮き彫りになり、教師にできる具体的な日本語教育支援のアイデア、（例えば漢字学習の支援方法など）を考えることができたと思います。

第三国定住難民へのクラスに関わって間もないため、難民等をとりまくことに関して概観できたこともありがたかったし、関わってきた方のお話を聞いて、その姿勢や意識なども伺えて、それらを感じられたことがありがたかった。日本語教育の内容に関しては、生活のための日本語教育について考えなおすきっかけにもなった。教師も学習者もいろいろな方とつながっていくことの大切さを改めて感じた。難民等の当事者の方の話を伺って、教師という立場としてだけでなく、日本人として日本社会がよくなるように、考えたり働きかけたりすることも大切だと感じた。

参考資料：受講者アンケート結果

【質問13（つづき）】 その他、研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたことがあれば教えてください。

支援のあり方は、個々人によって異なる事。個が大事であり、支援者は、半歩後ろを伴走する事。支援をする為に、支援者は学び続ける事。

ただ講義を聴くだけでなく、自分の気づきを具体的に言語化する機会が多くあったことで、研修内容を少しでも消化できたのではないかと思います。

難民と他の在日外国人の違いを理解し、それに伴う支援の特殊性についても理解できた。

学習者との適切な距離とはどこまでなのか、考えてしまうことがあった。おそらくそれは、実践の中で、ケースバイケースで学び、また、周りの方と相談しながら感じ取って行くこと、対処して行くことと理解した。

研修の中身もさることながら、グループワークや振り返りなどのやり方が、教師の在り方に対する学びになった。

難民等の人々の生活の厳しさ、心の不安について、研修で学べば学ぶほど、戦火の絶えない世界の状況と難民増加の現状をなんとかしなければならぬ、平和な世界をつくらなければならぬと痛感した。しかし、私は何が出来るのだろうかと自分の非力を思った。いや、非力を嘆いているばかりではどうにもならない。地域の人たちの協力を得て実践している自主夜間中学の活動を続けて行こう、たとえ小さな学びの場であろうと、止めないで続けて行こう、難民等の人の生きる力になるために何かできることをやっていこうと心に誓った。

日本語学習者に向き合うときに、先入観を持たず、向き合うことの大切さを改めて理解しました。そのために、こちらもあるのまの自己を表し、向き合わなければならないとわかりましたが、実はこのことは勇気があることだということも理解できました。

様々な立場の方のお話を直接伺ったことにより、人々が協力して難民を支援しているということが分かった。

難民等の多様性をまなび、自分自身がどう行動すればいいかしっかりと考えるようになった。

毎週日曜日の朝の講習は大変でしたが、自分の知らなかった難民の方たちの状況を知ることが出来て良かった

参考資料：受講者アンケート結果

【質問13（つづき）】 その他、研修全体の中でご自身の学びになったことや、気づいたことがあれば教えてください。

研修後、まだ難民支援に動き出していないが、この春からは何らかのアクションをしようと考えている。

毎回の講義がとても楽しみで素晴らしい研修でした。欠席への対応などもご配慮もいただきました。大変ありがとうございました。

研修で学んだこと全てを実践して、現在高校の取り出しクラス指導、県の支援団体、学校通訳組織、高校の管理職、先生方と繋がることができました！ありがとうございます。

「難民」当事者の方が「日本語」でこれまでのご自分を話されたお話は、様々な支援をどのように受けてきたか分かりました。また、演習「難民当事者との対話」や「教育実習」では、実際にお話ししながら、これまでの講義での知識をどのように活かすかを考える実経験になりました。

- ・講義を聞くだけの回について、ライブである必要性が感じられませんでした。例えば、講義を受講した後に、参加者同士で話し合い、学びを深められるような機会があればよりよかったのかなと思いました。
- ・全ての講義や演習、実習をオンラインで受講できたため、地方在住者にも学びの機会が与えられて、大変嬉しかったです。

報告書の実習4や面談2の最後にも書いたが、実習を通して、達成目標の捉え方が明確になった。

これまでバラバラだった知識がつなぎ合わさったような研修でした。最終レポートの執筆等遅れてしまい申し訳ありませんでしたが、大変勉強になりました。

日本語教育に特化した研修であると思っていたが、難民のメンタルケアやパターンランゲージに触れられているなどの点において、難民支援についてより大きなテーマがとりあげられていて、大きな学びとなった。

参考資料：受講者アンケート結果

その他に伝えておきたいことがあればお書きください。

この研修を受けて本当によかったと思っています。ありがとうございました。

研修内容は、思ったより内容が濃く充実したものだった。ありがとうございました。今後とも研修であった先生方とSlackか何かで繋がるように、研修後も途切れない何かがあると・オンラインでの雑談の場所などで情報を共有できると継続的に研修に内容を意識できそうです。

コーディネーターや先生方にはお世話になりました。ありがとうございました。みなさんの真摯な姿勢に襟を正し、自分の周りのできることに取り組んでいけたらと思っています。

研修ではなく、日本語授業を実施する場合、オンラインのメリットもありますが、やはり語学は対面が効果的であり、ベストです。その人の全体像を把握するためにも。ハリブリッド式もOKですが、オンラインだけというやり方は好ましくないと思います。

避難民の方に、その国の話、過去の経歴等を話題にすると、その回限りでは大変話が盛り上がったりするが、ご本人はその後、いろいろ考えて落ち込んでしまうことがある。

日本語を教えている方に、特に、話題を考える必要性をもっと伝えてほしい。

大変貴重な研修をさせていただきました。ありがとうございました。

難民について何も知識のない中で、受講しました。たくさんの情報、知識を提供頂き、本当にありがとうございました。講義でご紹介頂いた本《ネガティブ ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力》を今、読んでいます。

研修に参加してから、難民等の日本語教育についての情報に意識が向くようになりました。日本在住の日本語学習者だけでなく、海外の日本語教育機関で学ぶ日本語学習者の中にも難民的背景をもつ人がいらっしゃることを知りました。

良い研修をありがとうございました。

事務局の皆さまや実習アドバイザーには大変お世話になり、ありがとうございました。

参考資料：受講者アンケート結果

その他に伝えておきたいことがあればお書きください。

大変お世話になりました。ありがとうございました。

難民等に関わる環境や制度、組織などの知識が、概観できて役に立ち、日本語教師として、難民等の方を理解できるようになったことを実感しています。

また、様々な方の実践から得たお話をお聞きして、自分がどういう活動をしていきたいのか、毎回考えさせられました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

内容の濃い、有意義な学びの場をご提供いただき、ありがとうございました。

続編として、中級編、上級編の開催を希望します。

難民等への日本語教師初任研修として、講義の目的・進め方が明確で理論的でわかりやすいものと、そうではないと感じたものがあった。また、講義の振り返りシートにけっこう質問を書いたが、その返答がなく残念だった。

色々とお世話になりました。ありがとうございました。

難民の方の知識0からの研修で初期段階はどうしたらいいか、不安もあったが研修が進むにつれ徐々に理解し難民の方への日本語教育に関わりたいと感じるようになった。

座学だけの日と、グループワーク中心の日など、あらかじめスケジュールで教えていただけるとありがたいです。

久しぶりに、「日本語を教える」ことについて深く考える機会となりました。ありがとうございました。

もう少し実践に即した内容の授業が聞きたかった

高校の取り出しクラスに定住者、避難民など様々な背景の生徒がおり、それぞれ複雑な事情を抱えています。これまでの留学生への指導経験ではだめだと思い、藁にもすがる思いでこの研修に参加しました。参加して本当によかったです。ありがとうございました。

参考資料：受講者アンケート結果

その他に伝えておきたいことがあればお書きください。

単発でもいいので、また学びの機会をいただけますと幸いです。

参加前に実習時期等がもう少し明確になると、スケジュールを調整しやすいのかなと思いました。

- ・受講生同士が（オンライン上でも）もっと率直に話し合える場が欲しかったです。
- ・受講後に意見交換の場が任意で設けられていましたが、講義時間外なので講師側の負担にもなりますし、受講生側も参加できる人とできない人がいます。毎回の講義で意見交換や講師への質問の時間を確保していただけるようお願いいたします。
- ・引き続き、Slackやメールで難民等に関わる日本語教育や支援について情報共有していただき、フォローアップ研修などもあればぜひ参加させていただきたいと思っています。

最後のレポートは4回の実習が終わってから書けるような日程のほうが、より学びが深まると感じました。受講生や当事者のみなさんのご都合によると思いますが。

研修を終えると、短期間の間にオンライン講義、対面での演習、見学、実習等が組み込まれていてとても充実した内容だと感じました。

ただ、募集時の案内では、研修全体について理解するのが難しく、また、日程もかなり密であったため、自分が出来るのかどうか不安でした。研修中でも、今後の予定が分かりにくく、予定を立てずらい事が何度もありました。「難民」当事者の方や学習者の方があっての内容もあったのでなかなか難しいと理解しています。

個人的には、講義欠席のフォローをして頂き、無事に最後まで終わることが出来て、ほっとしています。ありがとうございました。

今回ご一緒した皆さんや講師の先生方と今後もつながり持ちたい。さぼうと21のスラックに参加させていただきたいです。